

いと い がわしんぱく

糸魚川真柏保存活用計画

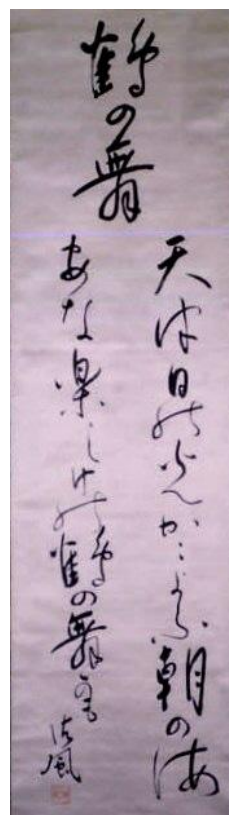


令和8年3月
新潟県糸魚川市

表紙：ヒスイと糸魚川真柏（糸魚川フォッサマグナミュージアム前）



口絵 1 糸魚川真柏（山田博信氏所蔵）



つる
まい
鶴の舞

あまつびのひかりが あさうみ
天津日能光か々よふ朝の海
たのげのつるまいか
あな樂しけ能鶴の舞可も 御風印

口絵 2 相馬御風命銘「鶴の舞」と御風揮毫の和歌（軸装）

※相馬御風は、糸魚川市出身の文人、詳細は 17 ページ参照



口絵 3 毎年5月に開催される翠風展^{すいふうてん}



口絵 4 糸魚川真柏の原産地として知られる明星山^{みょうじょうさん}の南壁と
国天然記念物「小滝川硬玉産地（小滝川ヒスイ峡）」

例 言

1. 本書は、糸魚川真柏（いといがわしんぱく）の盆栽、庭木、自然木等の保存と継承、持続可能な活用に関する計画書である。
2. 本計画は、令和7(2025)年度に糸魚川市産業部商工観光課（以下、「糸魚川市」という）が作成し、糸魚川真柏保存活用計画策定委員会の確認及び審議を受けて策定したものである。
3. 本書に掲載した写真及び図版は、糸魚川市が撮影並びに作成したものを中心に使用した。既知の文献等を使用する場合は、その典拠を明記した。
4. 本書で使用する糸魚川真柏等に関する語句について、下表のとおり定義する。ただし、この例に拠らない場合は、本文または注釈に記載するものとする。

しん ぱく 真 柏	ミヤマビャクシン（深山柏槇）の自然木のほか、庭木及び鉢植えなど人工的に手を加えたものの総称であるが、本書では主に盆栽に仕立てられた木を指す。
いといがわしんぱく 糸魚川真柏	当地域周辺に生育する固有の性質をもった真柏のこと。産地名を冠するものでは他に紀州真柏、四国真柏、東北真柏等がある。
やまど 山採り	山地等に自生する自然木を採取し、庭木や盆栽の素材として利用すること、または素材となった木そのもののこと。挿し木や取り木、接ぎ木など人工的に培養された木と区別される。
やま し 山 師	主に山採りを生業とする人たちのこと。明星山や黒姫山など険しい岩山での採取は命がけであったという。
ジオパーク	地球科学的意義のあるサイトや景観が保護、教育、持続可能な開発のすべてを含んだ総合的な考え方によって管理されたエリア（出典：日本ジオパークネットワークウェブサイト）。平成 27（2015）年 11 月 17 日に、国際連合教育科学文化機関（UNESCO）の正式プログラムに認定された。
フォッサマグナ	「大きな溝」を意味するラテン語。日本列島の中央部を横断する巨大な「地質学的な地溝帯」で、ドイツ人地質学者のエドムント・ナウマン博士が発見・命名した。
いといがわ しずおか 糸魚川ー静岡 構造線	東西日本を地質学的に分ける断層で、北アメリカプレートとユーラシアプレートの境界といわれる。この構造線の西側には、プレート運動で隆起した日本アルプス（飛騨山脈、木曽山脈、赤石山脈）の山々が連なり、東側にはフォッサマグナの大地が広がる。

糸魚川真柏保存活用計画の策定にあたって

令和6年4月、民間の有識者で組織される人口戦略会議の分析で、糸魚川市が「消滅可能性自治体」に分類されました。2020年から2050年までの30年間で、主な出産世代となる40歳未満の若年女性が半数以下になるため、何もしなければ人口減少が進んで「市」として成り立たなくなることを示唆するものです。言うまでもなく、住民は自治体の根幹をなす大切な財産です。引き続き官民連携のもと、多角的かつ総合的な対策を拡充するとともに、本市ならではの「強み」を生かした交流人口及び関係人口の拡大に向けた取組を強化していく必要があります。

では、本市の「強み」とは何なのでしょう。他地域との差別化を図るには何を売ればいいのでしょうか。そのキーワードは「糸魚川ユネスコ世界ジオパーク」であり、その象徴的なコンテンツとして、日本列島誕生を語るフォッサマグナと糸魚川―静岡構造線、国内随一の産出量を誇るヒスイ（翡翠）が挙げられます。ほかにも変化に富んだ地理地形、豊かな自然と多種多様な動植物、歴史ある伝統文化、四季折々の景観や食材なども魅力的ですが、なかでも「盆栽の王」とも称される糸魚川真柏は当地域の振興と発展に大きく寄与できる可能性を秘めた逸材と言えるでしょう。さらには、ヨーロッパや南アメリカ、東南アジアなど世界中に広く盆栽愛好家がいることから、外国人観光客の誘致も大いに期待できます。

しかし、糸魚川真柏を取り巻く環境は厳しく、決して楽観視できるものではありません。後継者不足をはじめ、情報発信の強化、受入態勢の整備、商品確保と販路の拡大、新たなツアーや体験メニューの開発など大きな課題が山積しています。関係者の高齢化も著しく、いま手を付けなければ近いうちに消滅してしまうかもしれません。

このような状況の中、令和2（2020）年度に市内の盆栽会や園芸店、観光協会、地元代表などで糸魚川真柏活用プロジェクト会議を組織し、講演会や体験イベントなどを中心とする普及啓発活動に力を入れてきました。そして本年度、これまでの経緯や成果を踏まえつつ、さらなるステップアップを図るために「糸魚川真柏保存活用計画」を策定する運びとなりました。今後は本計画で定めた目的や方針等に則りつつ、関係者と対話を重ね連携しながら、「ふるさとの宝」である糸魚川真柏を守り、生かし、未来へ伝える取組を推し進めてまいります。

結びに、本計画の策定に特段のご高配を賜りました関係各位に心から感謝申し上げます。また、策定委員の皆さまにおかれましては、本計画の進捗管理や事業評価等に対して引き続きご理解とご協力をお願いいたします。

令和8年3月

糸魚川市長 久保田 郁夫

目 次

口絵、例言、市長挨拶

第1章 糸魚川真柏保存活用計画の目的	1
第1節 計画作成の背景と目的	1
第2節 計画期間	2
第3節 計画策定の組織	2
第4節 計画の位置付け	3
第2章 糸魚川市の概要	4
第1節 位置・面積等	4
第2節 歴史的環境	4
第3節 自然・地理的環境	5
第4節 糸魚川ユネスコ世界ジオパーク	5
第5節 社会的環境	12
第6節 産 業	13
第3章 糸魚川真柏の概要	15
第1節 植物学的概要	15
第2節 自生地・地理的特徴	16
第3節 歴史・文化的特徴	17
第4章 糸魚川真柏の保存及び活用に関する将来像	19
第1節 将来像	19
第5章 糸魚川真柏の課題と対策	21
第1節 保存に関する現状と課題、今後の方針	21
第2節 活用に関する現状と課題、今後の方針	23
第3節 魅力づくりに関する現状と課題、今後の方針	25
第4節 盆栽文化の継承に関する現状と課題、今後の方針	27
口絵・図 目次	29
資 料 編	30
1 糸魚川真柏保存活用計画策定委員会規約	31
2 糸魚川真柏活用プロジェクト実施事業（令和2年～令和7年）	32
3 糸魚川真柏保存活用計画策定委員会 会議録	38

第1章 糸魚川真柏保存活用計画の目的

第1節 計画作成の背景と目的

真柏は、亜寒帯から熱帯まで世界中に広く分布する裸子植物ヒノキ科ネズミサシ属（ビャクシン属）に分類される常緑針葉樹で、標準和名はミヤマビャクシン（深山柏槇、学名 *Juniperus chinensis* L. var. *sargentii* A. Henry）という。

主に太平洋側の海岸沿いに自生し、高木にもなるイブキ（伊吹、ビャクシン）の高山や岩地へ適応した変種で、主幹が伏して屈曲し、枝が斜上する低木である。日本では北海道から本州、四国、九州の山岳地帯に分布している。園芸上は真柏と呼ばれ、盆栽樹種として人気がある。

糸魚川市内に自生する真柏は、明治43（1910）年に、愛媛県出身で山師の鈴木多平（すずき・たへい）氏によって発見された。雪国の過酷な環境下で培われた堅牢なジンとシャリ、細かく分かれた枝、鮮やかな葉色など固有の特性が盆栽素材として高く評価され、他の地域の真柏と区別するために「糸魚川真柏」と名付けられた。ほどなく鈴木氏は市内に移住し、糸魚川真柏の本格的な山採りを開始する。

その後、大正時代から昭和時代にかけて盆栽ブームが起こり、糸魚川真柏の人気も全国に広まった。樹齢を重ねた大物は数百万円という高値で取引引きされたという。真柏の山採りに拍車がかかり、黒姫山や明星山、海谷溪谷など市内の主な原産地で乱獲が進み、昭和50年頃になると目ぼしい自然木は取りつくされてしまった。

現在、市民レベルで糸魚川真柏を守り将来へ伝えようとする動きは見られるものの、関係者の高齢化が著しく、後継者育成や名木の市外流失への対応が喫緊の課題となっている。また、明星山をはじめとする原産地も乱獲のダメージが大きく、糸魚川真柏が繁茂したかつての自然環境の復元を望む声も少なくない。このような状況を踏まえ、令和2（2020）年に糸魚川市の呼びかけで糸魚川真柏活用プロジェクトを立ち上げ、行政と盆栽関係者、観光事業者、地元住民、糸魚川ジオパーク協議会等が連携しながら、今日に至るまで諸課題の解決に向けて各種事業を実施してきた。

一方、糸魚川真柏は知名度が高くブランド力があること、挿し木や接ぎ木等で簡単に増やせること、整枝に強く様々な樹形に仕立てられること、国内外に多くの愛好家がいること、高価で取引引きされることなどから、持続可能な活用による地域振興への寄与が期待されている。さらに、本市はユネスコ世界ジオパークに認定されているが、そのガイドラインでは、ジオ（大地）、エコ（自然）、ヒト（生物）を一体的につなげて理解を深めるためのストーリーが求められており、糸魚川真柏はその理想的なコンテンツになりうる素材である。実際に世界ジオパークネットワーク（GGN）や日本ジオパークネットワーク（JGN）の再認定審査や各種大会での発表等においても、糸魚川真柏に関する取組は相応の評価を得ている。

上記を踏まえ、現代を生きる私たちの責務として、また少子高齢化や人口減少など大きな課題を抱える本市の存続と発展に資するため、ヒスイとともに「ふるさとの宝」と称される糸魚川真柏を適切に生かし未来へ伝えるための方針となる糸魚川真柏保存活用計画（以下「本計画」という）を策定する。

第2節 計画期間

令和8（2026）年4月1日 から 令和18（2036）年3月31日 まで

本計画の計画期間は、上記のとおり10年間とする。

内容については、糸魚川市総合計画や糸魚川ユネスコ世界ジオパーク戦略プロジェクトなど関連計画との整合を図るとともに、社会情勢の変化や糸魚川真柏を取り巻く状況等を踏まえ、適宜更新するものとする。

第3節 計画策定の組織

本市における糸魚川真柏の保存と活用については、前述のとおり糸魚川真柏活用プロジェクト（事務局：糸魚川市産業部商工観光課）が中心となって取り組んできた。これまで実施した事業については巻末の「資料編」にまとめたが、糸魚川真柏の価値の向上や魅力の発信、ツアー及び体験メニューの開発やマーケティング、地元住民等の関心を喚起するための講演や体験イベントなど普及啓発活動がメインとなっている。

今後は、これまでの事業の成果や継続等について検証したうえで、糸魚川真柏の保存及び展示に供するための拠点施設等の整備、後継者育成に向けた人材雇用、個人等を巻き込むためのサポーター制度整備、観光事業者との連携強化等が必要である。諸課題の解決に向け目的や活動のベクトルを合わせるため、下表のとおり有識者や盆栽関係者等による策定委員会を組織し、本計画の内容について確認及び審議を行うものとする。

【 糸魚川真柏保存活用計画策定委員 】

※順不同、敬称略

No.	役 職	所属・役職等	分 野	氏 名	備 考
1	委 員 長	東海大学 教授	観 光	ほんだ かずひさ 本田 量久	学識経験者
2	副委員長	糸魚川盆栽会 会長	盆 栽	ごとう たかね 後藤 高根	盆栽関係者
3	委 員	上越教育大学 教授	植 物	いおかわ ゆう 五百川 裕	学識経験者
4	委 員	さいたま市大宮盆栽美術館 技師	盆 栽	なかむら しんた 中村 慎太	技術経験者
5	委 員	妙高高原自然保護事務所 自然保護管	環 境	あきもと めぐる 秋本 周	環境省
6	委 員	糸魚川盆栽会 事務局長	盆 栽	やまだ ひろのぶ 山田 博信	盆栽関係者
7	委 員	小滝地区自治振興協議会 会長	地 域	いとう のぶまさ 伊藤 信正	住民代表
8	委 員	(一社)糸魚川市観光協会 事務局長	観 光	さいとう せいいち 齊藤 清一	観光事業者

【 事務局 】

No.	所 属	役 職	氏 名	備 考
1	糸魚川市産業部商工観光課	課 長	山 崎 和 俊	
2	//	課長補佐	小 林 猛 生	
3	// ジオパーク推進係	主 査	霜越 智恵子	
4	//	主 査	鳥 越 寛 子	
5	//	職 員	ブラウン・セオドア	

【 委員会の開催と主な審議事項 】

No.	日 時	会 場	参加者
1	令和7年12月24日（水） 14:00～16:00	糸魚川市民会館 3階会議室	11人 委員 7人、事務局 4人
	【主な報告・審議事項】 1 糸魚川真柏保存活用計画策定委員会の規約について 2 糸魚川ジオパークと糸魚川真柏の概要について 3 計画策定に係る糸魚川市の方針について 4 策定スケジュールについて		
2	令和8年2月4日（水） 14:00～16:40	糸魚川市役所 2階 204 会議室	10人 委員 6人、事務局 4人
	【主な報告・審議事項】 1 計画策定に係る糸魚川市の方針について ※糸魚川真柏保存活用計画（案）全体の内容について審議		
3	令和8年3月13日（金） 14:00～16:45	糸魚川市民会館 2階 201 会議室	8人 委員 6人、事務局 2人
	【主な報告・審議事項】 1 計画策定に係る最終確認 ※糸魚川真柏保存活用計画（案）全体の内容について審議		

※ 詳細は巻末の「会議記録」でご確認ください。

第4節 計画の位置付け

本計画は、糸魚川真柏の保存及び活用に関するマスタープラン（総合計画）である。

今後の具体的な活動については、本計画の方針に基づき、社会情勢や費用対効果を考慮し、有識者や関係者の意見等を踏まえたうえで、中期的なアクションプラン（実施計画）を策定して取り組むものとする。

第2章 糸魚川市の概要

第1節 位置・面積等

(1) 位置

本市は、新潟県の西端に位置し、東は上越市、南は妙高市、長野県北安曇郡小谷村及び白馬村、西は富山県下新川郡朝日町と接している。市域の北には日本海が広がり、51.33 kmの長い海岸線を有する。

【経緯度】

座 標	糸魚川市役所
北 緯	37 度 02 分 21 秒
東 経	137 度 51 分 46 秒

【主要都市からのアクセス】

鉄路は、平成 27 (2015) 年の北陸新幹線糸魚川駅開業及び令和 6 (2024) 年の敦賀延伸により東京や大阪、名古屋など主要都市圏からの移動時間が短縮された。

自動車では、国道 8 号と国道 148 号、北陸自動車道が主なアクセス道路となっている。

(2) 面積

市域は 746.41 平方キロメートルで、東京 23 区の合計面積を上回る。



図 1 糸魚川市章

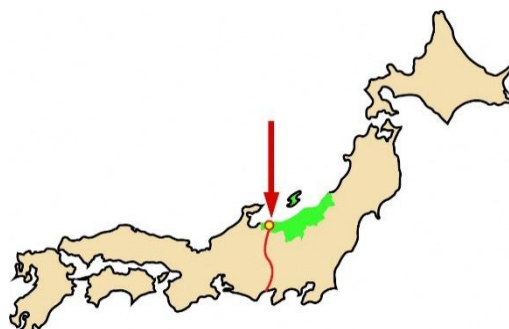


図 2 糸魚川市の位置

第2節 歴史的環境

本市周辺は、かつて「西浜七谷（にしはまななたに）」と呼ばれ、東から上越市の桑取谷と名立谷、糸魚川市に入り能生谷（のうだに）、早川谷、西海谷、根知谷、川西谷（今井・小滝・青海地区）の 7 つの谷が、険しい山々から急流となって日本海へと注ぎ込む地形を形成している。各河川の流域付近を中心に人々の暮らしが営まれてきたことから、その谷固有の風習や方言等が今も残っている。

市域の中央を北流する姫川は、長野県白馬村親海湿原（およみしつげん）付近を源流とする急流として知られ、根知川、大所川、虫川などを合わせて海岸まで大型礫を運んでいる。平坦地はこうした河川の流域と沖積地から海岸砂丘に広がり、能生川の扇状地に能生、姫川と海川の間には糸魚川、姫川と青海川の間には青海の市街地が形成されている。

(1) 世界最古級のヒスイ文化発祥地

本市は国内随一のヒスイ産出地であり、「世界最古級のヒスイ文化発祥地」である。ヒスイの利用を知ることができる最も古い事例は、大角地（おがくち）遺跡で発見されたヒスイ製の敲石（たたきいし）で、約 6,500 年前の縄文時代前期にまで遡る。

約 5,000 年前の縄文時代中期頃からヒスイ加工が盛んになり、国史跡・長者ヶ原遺跡（ちょうじゃがはらいせき）や同じく国史跡・寺地遺跡で加工された大珠（たいしゅ）や勾玉などヒスイ装飾品が日本や朝鮮半島などに供給された。なお、国内の遺跡から出土するヒスイ製品は、成分分析等の結果、すべて糸魚川産ヒスイが用いられたものとされている。



図 3 ヒスイ製大珠

第3節 自然・地理的環境

日本海に面する海岸線は 51.33 kmあり、東部には砂浜、砂利浜が広がり、富山県境に近い西部には天険・親不知（てんけん・おやしらず）の断崖絶壁が続く。南部には新潟県最高峰の小蓮華山（2,766m）をはじめとする北アルプス（飛騨山脈）の高山が連なる。日本海から 3,000m級の山々まで高低差のあるダイナミックな自然が広がる市域には、2つの国立公園（妙高戸隠連山国立公園、中部山岳国立公園）と3つの県立自然公園（白馬山麓県立自然公園、久比岐県立自然公園、親不知子不知県立自然公園）が指定されている。

市域は、約6割が森林山野である。人々の生活の場となる平野部は、各河川の下流域の堆積地や扇状地、日本海沿岸の砂丘地などに限られる。



図 4 市内に広く分布するブナ林

第4節 糸魚川ユネスコ世界ジオパーク

(1) 世界ジオパーク認定

平成 16 (2004) 年に世界ジオパークネットワーク (GGN) が組織され、平成 19 (2007) 年に日本ジオパーク連絡協議会が発足する。同年、本市は世界ジオパークを目指す意思を表明し、認定に向けた活動を開始した。平成 20 (2008) 年に糸魚川を含む国内 7 地域が日本ジオパークに認定され、翌 21 (2009) 年に糸魚川、洞爺湖有珠山、島原半島の 3 地域が日本で初めて世界ジオパークに認定された。

平成 27 (2015) 年 11 月 17 日には、ジオパークがユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の正式プログラムに昇格し、世界的な広がりを見せている。

【糸魚川ジオパークのあゆみ】

- ・ 昭和 62 (1987) 年
「フォッサマグナと地域開発構想」を策定
※ヒスイやフォッサマグナなど特徴的な地質資源を地域振興に活用する構想
- ・ 平成 2 (1990) 年
フォッサマグナパーク（糸魚川ー静岡構造線断層露頭の見学公園）オープン
- ・ 平成 3 (1991) 年
世界に先駆け、野外見学地を「ジオパーク」と呼称
- ・ 平成 6 (1994) 年
糸魚川フォッサマグナミュージアム（以下、「フォッサマグナミュージアム」という）と長者ヶ原考古館が開館
- ・ 平成 8 (1996) 年
青海自然史博物館が開館
- ・ 平成 13 (2001) 年
長者ヶ原遺跡公園オープン
- ・ 平成 17 (2005) 年
糸魚川市、能生町、青海町の 1 市 2 町が合併して新糸魚川市が誕生
- ・ 平成 20 (2008) 年
糸魚川など 7 地域（洞爺湖有珠山、アポイ岳、南アルプス、山陰海岸、室戸、島原半島、糸魚川）が日本ジオパークに認定
- ・ 平成 21 (2009) 年
世界ジオパークに認定、香港ジオパークと姉妹ジオパーク提携を結ぶ。
※当時のジオパークは、ユネスコが支援するプログラムであった。
- ・ 平成 27 (2015) 年
世界ジオパークがユネスコ正式事業となり、「ユネスコ世界ジオパーク」に昇格

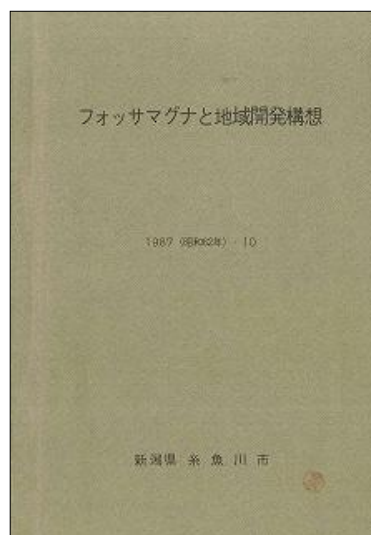


図 5 フォッサマグナと地域開発構想



図 6 フォッサマグナミュージアム



図 7 世界ジオパーク認定



図 8 ユネスコ世界ジオパーク再認定

(2) ジオパーク活動の目的

本市は、世界ジオパークに認定される前から「フォッサマグナと地域開発構想」に基づいて見学地や施設等の整備、博物館活動による地域資源の掘り起こしや市民に対する周知を行っており、これらの活動が世界ジオパーク認定の基礎となった。

糸魚川－静岡構造線やフォッサマグナ、世界最古級のヒスイ文化など世界的価値を有する優れた地域資源は、市民が故郷を誇り愛する気持ちの拠り所となりえる。

ユネスコ世界ジオパークに認定されたことにより、市民が日ごろから目にしている地形や景観のほか、自然や祭、伝統行事、食材、温泉なども大地と人の営みが生み出した大切な地域資源であることを理解し、今まで以上に故郷に対する誇りをもつことができるようになってきている。市民やさまざまな団体との協働によって、これらの資源を守り、活かしながら持続可能な地域社会をつくっていかうとする取組は、今後ますます進展していくことが期待される。

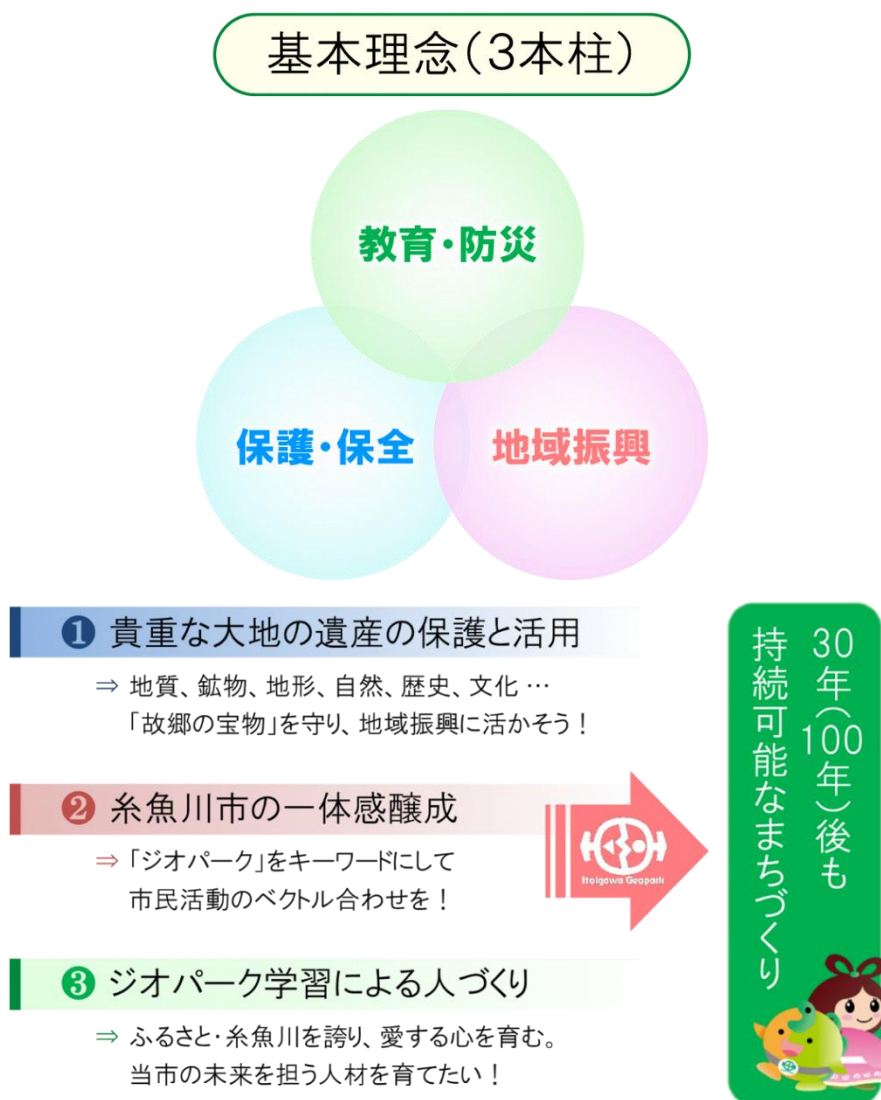


図 9 糸魚川ジオパークの基本理念

【24 か所のジオパークエリア】

前述のとおり、本市全域がユネスコ世界ジオパークに認定されているが、その中でも日本列島の形成や当地域の地質や自然、歴史文化など特徴的な見どころを関連付けて学ぶことができる 24 のエリアを設けている。

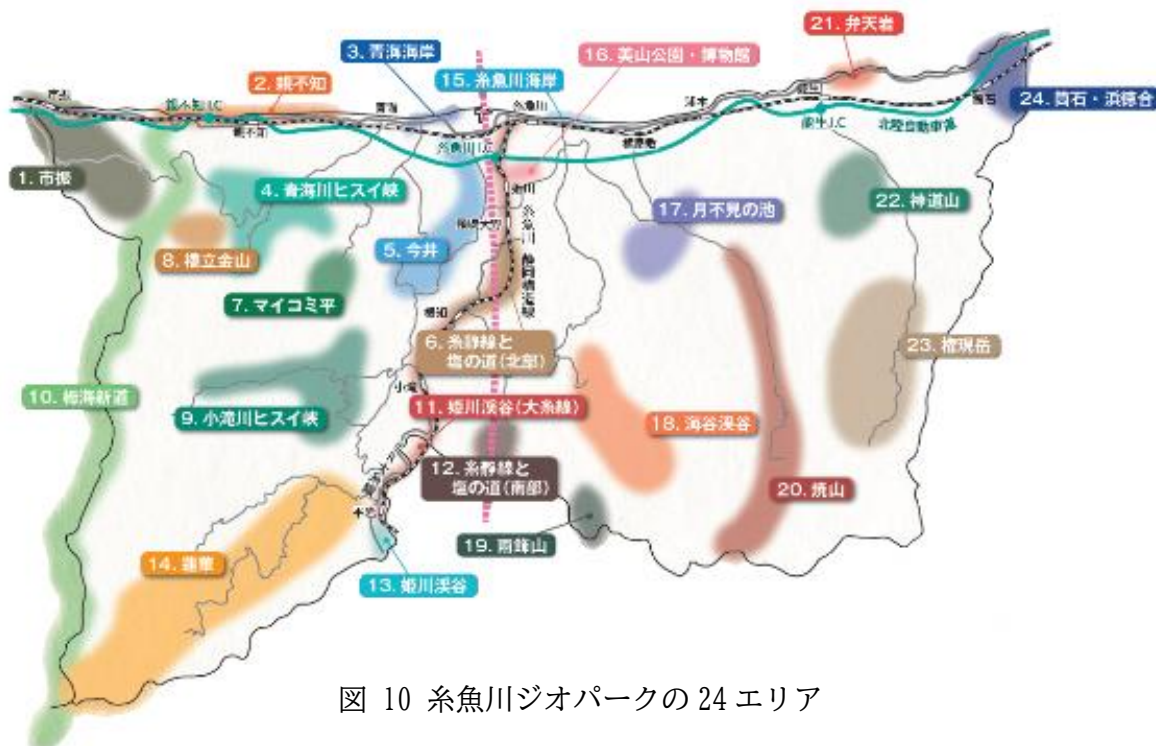


図 10 糸魚川ジオパークの 24 エリア

- 1 市振エリア / ヒスイと化石、俳人・芭蕉の宿場町
- 2 親不知エリア / 断崖絶壁と街道、東西文化の境界
- 3 青海海岸エリア / 縄文人の暮らしとヒスイ海岸
- 4 青海川ヒスイ峡エリア / 地下深部の地質現象
- 5 今井エリア / フォッサマグナができたころの地質と岩石
- 6 糸魚川-静岡構造線と塩の道(北部)エリア / 巨大断層に沿う北部塩の道
- 7 マイコミ平エリア / ドリーネ群と高山植物
- 8 橋立金山エリア / 糸魚川最大の金鉱山跡
- 9 小滝川ヒスイ峡エリア / ヒスイの故郷と明星山の大岩壁
- 10 梅海新道エリア / 日本海と北アルプスを繋ぐ登山道
- 11 姫川溪谷(大糸線)エリア / ジオパーク鉄道の旅
- 12 糸魚川-静岡構造線と塩の道(南部)エリア / 巨大断層に沿う南部塩の道
- 13 姫川溪谷エリア / 海底火山の大断面
- 14 蓮華エリア / 噴気帯と氷河がつくった湿原
- 15 糸魚川海岸エリア / 糸魚川を物語る歴史と文化の玉手箱
- 16 美山公園・博物館エリア / ジオパークの情報センターと長者ヶ原遺跡
- 17 月不見の池エリア / 地すべりと棚田、石仏巡り
- 18 海谷溪谷エリア / 海底火山の大断面
- 19 雨飾山エリア / 日本百名山・久恋の山
- 20 焼山エリア / 活火山の恩恵と防災
- 21 弁天岩エリア / 海底火山がもたらした海洋文化
- 22 神道山エリア / 海底火山の山体と里山景観
- 23 権現岳エリア / 山間部の小さく不思議な変動帯
- 24 筒石・浜徳合エリア / 砂岩泥岩互層と漁村

(3) 地形・地質

一級河川・姫川は、日本列島を地質的に東西に分断するフォッサマグナの西端を通る糸魚川－静岡構造線に沿うように流れている。姫川以西の山々は古生代（約5億4,200万年前から約2億5,100万年前）や中生代（約2億5,100万年前から約6,550万年前）の地層から成り、飛騨変成岩帯では角閃石、蛇紋岩などの変成岩とヒスイなど稀少鉱物を産出する。また、明星山（1,188m）一帯は石灰岩から成り、黒姫山（1,221m）周辺は大規模なドリーネが点在するカルスト地形で知られ、豊富な石灰岩は化学工場やセメント工場の営みを支えてきた。

一方、姫川以东は新生代（約6,550万年前から現在）の地層から成り、山々の様相または河床や海岸の礫などは、姫川以西と大きく異なる。海川上流の海谷溪谷や市域東部の徳合地区などでは、かつて海底で形成された砂岩や泥岩

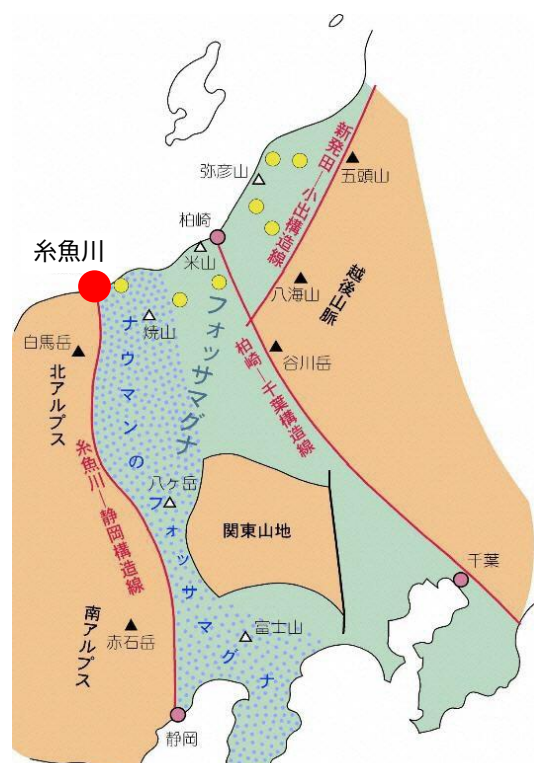


図 11 フォッサマグナの位置

の互層から成る急崖を観察できる。また、現在も噴気を上げる早川上流の活火山・新潟焼山（2,400m）の裾野では、過去に発生した大規模な火砕流と土石流の痕跡、能生川の下流域では海底火山の痕跡等が確認できる。

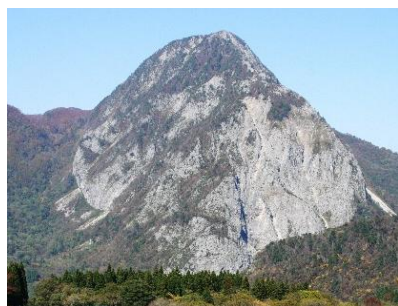


図 12 明星山（1,188m）

海底も起伏に富み、海岸から比較的近い距離で深海に至る地形となっている。こうした2,000mの海底から標高3,000m級の山並みまで5,000mもの高低差を有する特殊な地形により、貴重な自然や生態系を随所に観察することができる。

(4) 気 候

日本海側の気候に属する。市域全体が「特別豪雪地帯」に指定されており、山間部では積雪深が2mを超える場所も少なくない。令和7（2025）年の平均気温は14.4℃、降水量は年間約2,900mmである。

高い山に囲まれた南北に伸びる谷が多く、川は南から北に一直線上に流れるため、春から夏にかけてフェーン現象が起こりやすく、川を沿うように強い南風が吹く。姫川沿いに吹く強風は「蓮華おろし」と呼ばれ、平成28（2016）年12月22日に発生して147棟を焼損した「糸魚川市駅北大火」の延焼拡大の原因となった。

(5) 生態系

本市は、前述のとおり起伏に富んだ地形や北陸地方特有の気候などにより、多種多様な動植物が生息・生育している。植生においては、海浜植物から高山植物まで様々な植物からなる群落が各所に分布している。黒姫山周辺のカルスト地形に点在するドリーネの底部（標高約 700m）では、洞穴からの冷氣の影響を受け、主に標高 1,500m以上の亜高山帯から高山帯に分布するキバナノコマノツメやミヤマアカバナ、オオバミゾハウズキが生育し、植生の逆転現象を見ることができる。



図 13 白馬連山高山植物帯

また、昭和 12（1937）年に国天然記念物に指定された「能生白山神社社叢」では、対馬暖流の影響を受ける海岸に面し、暖地性樹種のアカガシ、タブノキ、ヤブツバキなどが、



図 14 ニホンカモシカ

林床に日本海要素植物のヒメアオキ、トキワイカリソウ、スミレサイシンなどを伴って樹林を形成している。さらに、ブナ林についても、日本中部では主に標高 500～1,500mに分布するとされるが、本市では大平地区をはじめ低標高地において見ることができる。

動物では、国特別天然記念物のニホンカモシカやライチョウ、国天然記念物のヤマネのほか、レッドリストに掲載されているイヌワシ、ホンドオコジョ、ハクバサンショウウオ、ヒメギフチョウ、ム

ラヤママイマイなど日本の固有種や絶滅のおそれがある動物が分布している。

海は魚介類の宝庫となっているが、その理由は大地の活動により形成された独特な海底地形にある。沖合には富山トラフと呼ばれる深さ 2,500～3,000mほどの海底の谷があり、ベニズワイガニやホッコクアカエビ、アンコウ類などの深海生物が生息している。また、能生地域の海底は、海底火山の噴出物でできた岩石が漁礁となり、多種多様な魚介類が生息している。水深が急に深くなる急峻な海底地形になるため、沿岸付近でも、様々な水深に生息する魚介類が見られる。このように、本市の自然環境が、独特で豊かな植物相・動物相を形成している。



図 15 水揚げされるベニズワイガニ

(5) 文 化

市域西側の富山県境には急峻な北アルプス（飛騨山脈）が南北にそびえ立ち、断崖絶壁となって日本海に落ち込んでいる。古くから北陸道最大の難所として「天下の険」と呼ばれた親不知が人や物の行き来を妨げ、日本の東西文化に変化をもたらす大きな要因になったと言われている。

このような自然的・地理的な要因によって、下表に示すような西と東の文化の混在が、人々の暮らしの中にも現れている。

西日本		東日本	
お正月のもち	丸型	お正月のもち	角型
歳取り魚	ブリ	歳取り魚	サケ
畳の寸法	京間	畳の寸法	江戸間
お醤油の味	薄口	お醤油の味	濃口
だしの味	昆布	だしの味	カツオ
電源の周波数	60Hz	電源の周波数	50Hz

図 16 日本の東西文化の違い

第5節 社会的環境

(1) 沿 革

明治 21 (1879) 年 6 月の内務大臣訓令により、それまで自然の集落を基礎としていた小規模な町村が集約され、明治 34 (1901) 年に 2 町 16 村となった。昭和 28 (1953) 年には町村合併促進法が施行され、翌 29 (1954) 年 6 月 1 日に糸魚川市、10 月 1 日に能生町、青海町となった。平成 17 (2005) 年 3 月 19 日には、糸魚川市、能生町、青海町が合併し、新たな糸魚川市が誕生して現在に至る。

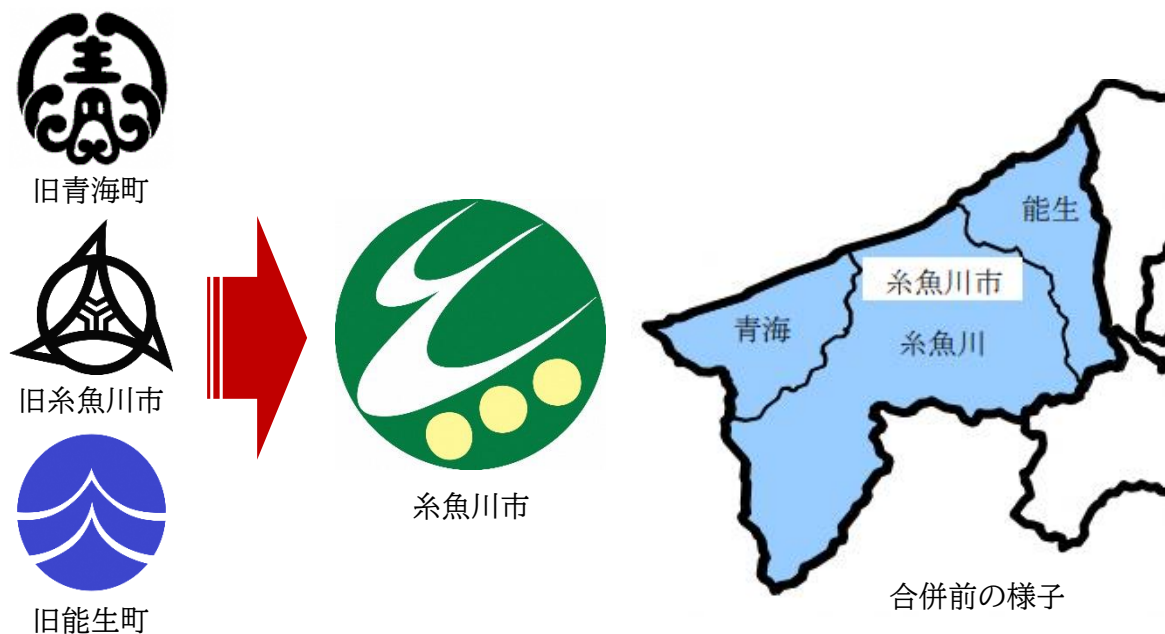


図 17 1 市 2 町の統合

(2) 人 口

昭和 60 (1985) 年には約 6 万人、平成 17 (2005) 年の市町村合併時には約 5 万人であったが徐々に減少し、令和 7 (2025) 年 12 月 1 日で 37,103 人となった。

国立社会保障・人口問題研究所において公表された国勢調査に基づく人口推計によると、令和 22 (2040) 年には 27,202 人、令和 42 (2060) 年には 16,479 人まで減少すると予測されている。

(3) 土地利用

本市は、前述のとおり 746.24 ㎥と広大な面積を有するが、その 94.6%を山林や原野等が占めている。次いで農地の割合が高く、その大部分は「田」である。

宅地の割合は 1.44%で、半分以上が「住宅用地」である。また、本市の面積の約 12.8%にあたる 95.29 ㎥が糸魚川市都市計画区域に指定され、そのうち 10.49 ㎥が用途地域指定区域となっている。

(4) 交 通

交通網は、海岸線を走る一般国道 8 号と長野県へと抜ける一般国道 148 号が主要道路となっている。また、昭和 63（1988）年に北陸自動車道が開通し、海沿いの急崖地を走る一般国道 8 号が通行止めとなった際の迂回路が確保された。

鉄路は、大正 2（1913）年に北陸本線が、昭和 32（1957）年には大糸線が全線開通し、人の移動手段と物の流れの利便性が飛躍的に向上した。平成 27（2015）年には北陸新幹線が開通し、首都圏への移動が乗換えなしで 2 時間台にまで短縮された。同時期に北陸本線は、北陸新幹線の開業に伴い J R から経営分離され、えちごトキめき鉄道株式会社が運行する「日本海ひすいライン」となった。

バスは、路線バスのほかにコミュニティバス（定員 11 人以上）及び乗合タクシー（定員 10 人以下）を運行している。



図 19 JR 糸魚川駅に到着する北陸新



図 18 親不知の 4 世代道路

第 6 節 産 業

(1) 農 業

経営耕地面積は、総面積の約 1.9%（143,531a）であり、そのうち水田が約 95%と稲作が主体となっている。そのほか、越後姫（イチゴ）、越の丸ナス、メロン、シイタケなどが特産品として生産されている。



図 20 越の丸ナス

(2) 漁 業

本市の沖合は、四季を通して豊富な漁場として知られ、筒石、能生、浦本、糸魚川、親不知、市振といった漁港を中心として沿岸漁業が盛んである。

その中でもベニズワイガニやホッコクアカエビ、アンコウ、タラ、ゲンギョなどは、本市に欠かせない海の幸として知られている。



図 21 代表的な海の幸

(3) 観 光

観光入込客数は、平成 13 年度の約 300 万人をピークに年々減少し、一時は約 170 万人まで落ち込んだ。平成 27 (2015) 年の北陸新幹線開業によって約 250 万人代にまで回復したものの、令和 2 (2020) 年は新型コロナウイルス感染拡大などの影響により 120 万人まで減少した。

目的別観光入込客数では、道の駅などの産業観光が全体の 47.7% を占めており、次いで文化施設、温泉の順となっている。マリンドリーム能生や親不知ピアパーク（いずれも道の駅）は集客力があるが、そこから他の観光施設に人が流れる仕組みが弱い。



図 22 谷村美術館、糸魚川温泉、シャルマン火打スキー場、ヒスイ海岸



図 23 道の駅 親不知ピアパーク（左）マリンドリーム能生（右）

第3章 糸魚川真柏の概要

第1節 植物学的概要

(1) 植物分類学上の特徴

真柏は、裸子植物ヒノキ科ネズミサシ属（ビャクシン属）に分類される常緑針葉樹で、標準和名はミヤマビャクシン（深山柏槲、学名 *Juniperus chinensis* L. var. *sargentii* A. Henry）という。雌雄異株で、雌株には紫黒色に熟す肉質液果状の球果をつける。主に太平洋側の海岸沿いに自生し高木にもなるイブキ（伊吹、ビャクシン）の高山や岩地へ適応した変種で、主幹が伏して屈曲し、枝が斜上する低木である。

日本では北海道から本州、四国、九州の山岳地帯に分布している。園芸上は真柏と呼ばれ、盆栽樹種として人気がある。



図 24 細かく鮮やかな鱗葉が特徴

(2) 園芸上の特徴

当地域に自生する個体は園芸上、「糸魚川真柏」と呼ばれ、盆栽として高く評価されている。糸魚川真柏の最大の特徴は、「葉性（はしょう）」にある。他の産地で育った真柏と比較して葉の緑色が鮮やかで、鱗片葉（うろこば）が短く密生する性質を持つ。この類まれな葉性により、枝が間延びしにくく緻密な樹冠を形成することが可能となる。このほか、若木や強い剪定を受けた際に杉の葉のようにとがった「針葉（しんよう）」または「杉葉（スギッパ）」が現れる場合があり、「先祖返り」と呼ばれる。

また、他の樹木に比べて、幹や枝の木質部が非常に硬くなることも特筆すべき点である。



図 25 小品の糸魚川真柏
（片岡迪郎氏所蔵）

特に峻険な岩場という過酷な環境下で、数十年から数百年という長い年月をかけて緩やかに成長した天然木は、年輪が込み合った堅牢な木質部を形成する。腐食せずに枯死した幹や枝が「白骨」のように見えることから、盆栽用語で「シャリ（舍利）」や「ジン（神）」と呼ぶ。葉の緑色と生きた幹の赤褐色、ジンやシャリの乳白色が織りなすコントラストは美しく、「自然の芸術」と呼ばれている。

第2節 自生地・地理的特徴

(1) 糸魚川真柏の分布

かつては、富山県の黒部峡谷から長野県の戸隠連山まで広いエリアに生育する真柏を「糸魚川真柏」と総称したが、現在は当地域の山間地のみが対象となっている。主な自生地は、明星山（1,188m）、黒姫山（1,222m）、雨飾山（あまかざりやま、1,963m）、新潟焼山（2,400m）、海谷溪谷の千丈ヶ岳等 800m～1,200m の峻険な岩壁である。

これらの山々は、日本列島の形成に関わる活断層「糸魚川－静岡構造線」に沿うようにそびえ立つ。糸魚川真柏は、まさに当地域ならではの地形や気候が育て上げた特徴的な樹種であると言える。

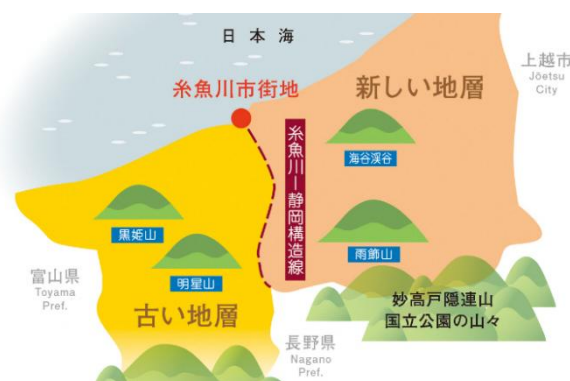


図 26 糸魚川市内の主な産地

(2) 自生地の環境

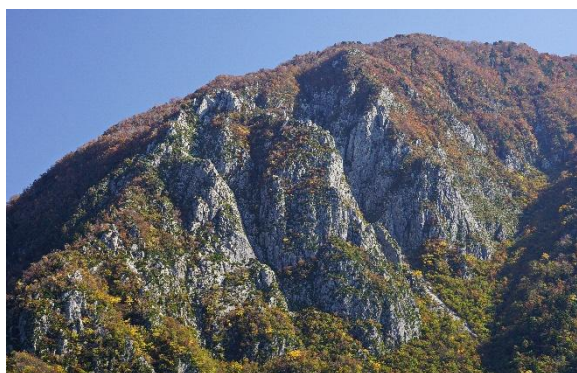


図 27 黒姫山の岩肌

代表的な自生地である明星山や黒姫山の大部分は、約3億年前に赤道付近にあったサンゴ礁がプレート運動により運ばれて隆起した石灰岩でできている。切り立った断崖は保水力が低く乾燥しやすいうえにアルカリ性が強い土壤中、栄養分に乏しく植物が生育するには過酷な環境となっている。

さらに、日本海側に位置するこの地域は、冬季は厳しい寒風と積雪に見舞われ、夏には直射日光による高温にさらされる。糸魚川真柏は、このような他の樹木が繁茂できない「生存の限界点」ともいえる過酷な環境の中で数十年から数百年という悠久の時をかけて育ってきた。

なお、糸魚川真柏の自生地は、アルカリ性の石灰岩地帯に限定されるものではない。頸城三山（くびきさんざん）の一峰であり、現在も噴気を上げる活火山の新潟焼山、深田久弥の名著「日本百名山」のひとつに数えられる雨飾山等の周辺にも天然木が見られる。これらの山々は、主に火山活動や地下からのマグマ貫入によって形成された火成岩でできおり、石灰岩地帯とは異なる地質である。

このように、糸魚川－静岡構造線やフォッサマグナの形成、あるいは火山活動という異なる地学的な歴史を持つ多様な大地に広く分布している点は、糸魚川真柏の生態を語るうえで欠かせない特徴となっている。

第3節 歴史・文化的特徴

(1) 真柏の発見とブーム到来

真柏が歴史の表舞台に登場するのは、明治時代中期である。四国の霊峰・石鎚山（いしづちさん、1,982m）の断崖で発見・採取された真柏が流通し、優れた盆栽素材として認められ、盆栽界に大きな衝撃を与えた。それまではイブキ（伊吹）が盆栽に使われていたが、より美しく仕上がる真柏が人気を博し全国的に主流となった。

真柏の荒々しい幹肌と緻密な葉性は盆栽愛好家を熱狂させ、空前の「真柏ブーム」を巻き起こした。需要の高まりに応じて短期間に過度の採取が行われた結果、石鎚山の天然木は姿を消してしまった。

(2) 糸魚川真柏の発見

糸魚川真柏が世間に知られるようになったのは、明治時代末期のことである。明治 43（1910）年、愛媛県出身の鈴木多平（すずき・たへい）氏が真柏を求めて北海道へ赴いた帰路に船上から黒姫山を望み、その山容が故郷の石鎚山に似ていることから、真柏の存在を直感したという。下船して山へ入った鈴木氏は、石鎚山の真柏を遥かに凌ぐ葉性の美しい天然木に出会う。



図 28 沖合から見る黒姫山



図 29 名木を産出した明星山

この発見を機に、真柏の人気は再び急上昇し、明星山などの断崖絶壁から命懸けで天然木を採取する山採りが盛んに行われるようになる。この時期に多くの名木が山から下ろされ、日本の盆栽文化を象徴する作品として仕立てられて全国へと広まっていった。なお、鈴木多平氏の一族が採取した糸魚川真柏は、当時は「四国産」として市場に出回っていたという。

明治末期から大正 8 年頃まで、糸魚川の市街地にある寺院・直指院（じきしいん）の境内で卸売市場が開かれており、ここで初めて「糸魚川真柏」として他の産地と区別されるようになった。

文化的な面では、糸魚川市出身の文人で、越後の名僧・良寛の研究をはじめ、童謡「春よ来い」や早稲田大学校歌等の作詞を手がけ、歌人、詩人、自然主義評論家として活躍した相馬御風（そうま・ぎよふう）の関わりも深い。御風は、「故郷の宝」として糸魚川真柏を深く愛し、数々の名木に風雅な名前を授けた。その代表格が躍動感あふれる姿から名付けられた「鶴の舞」（口絵参照）である。

このように、糸魚川真柏は単なる園芸植物の枠を超え、



図 30 相馬御風

地域の歴史や風土とも深く結びついた文化的象徴としての地位を確立してきた。今日の世界的な盆栽（BONSAI）ブームの中で、糸魚川真柏は「Itoigawa（いといがわ）」という世界共通の固有名詞で呼ばれている。

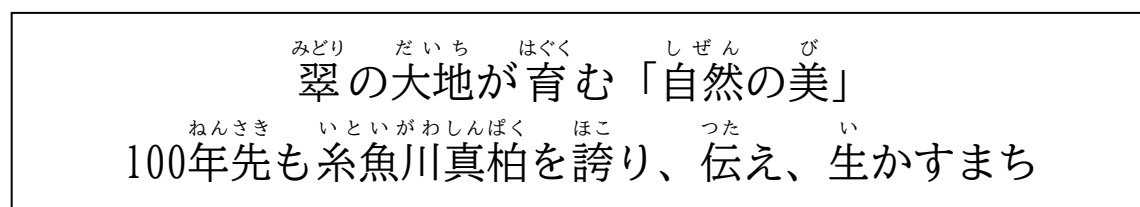
自生地での採取が厳しく制限・保護されるようになった現代では、先人たちが守り伝えてきた名木の保全と挿し木等による後継樹の育成などの継承活動が重要な課題となっている。

第4章 糸魚川真柏の保存及び活用に関する将来像

第1節 将来像

大地の営みと自然や人のつながりを物語る糸魚川真柏は、糸魚川ユネスコ世界ジオパークを代表する見どころのひとつである。日本列島が誕生する過程で海洋プレートの運動によって隆起した明星山や黒姫山、火山活動で形成された海谷溪谷など険しい山々の岩壁で長い年月を生き続けてきた糸魚川真柏、その生命力あふれる姿に「美」を見出し盆栽という芸術へと昇華させた先人の努力と知恵、生活の糧を得るために命をかけて山採りに挑んだ人々、国内外の愛好家に「盆栽の王」と称されるブランド力…。これらは、世界に通じる本市ならではのジオストーリー（大地の物語）と言える。

しかし、糸魚川真柏は、かつての乱獲による天然木の減少をはじめ、気候変動による環境変化、名木の枯死や市外流出、後継者不足など喫緊の課題に直面している。このような現状を踏まえ、本計画における「糸魚川真柏の保存及び活用に関する将来像」について、次のとおり定める。



・将来像に込めた思い

「翠」は、糸魚川真柏の葉の鮮やかな緑色と本市特産で「日本の国石」「新潟県の石」になっているヒスイ（翡翠）を、「大地が育んだ自然の美」は、プレート運動で形成された糸魚川ジオパークの急峻な山々が育んだ糸魚川真柏の美しさや力強さを表す。

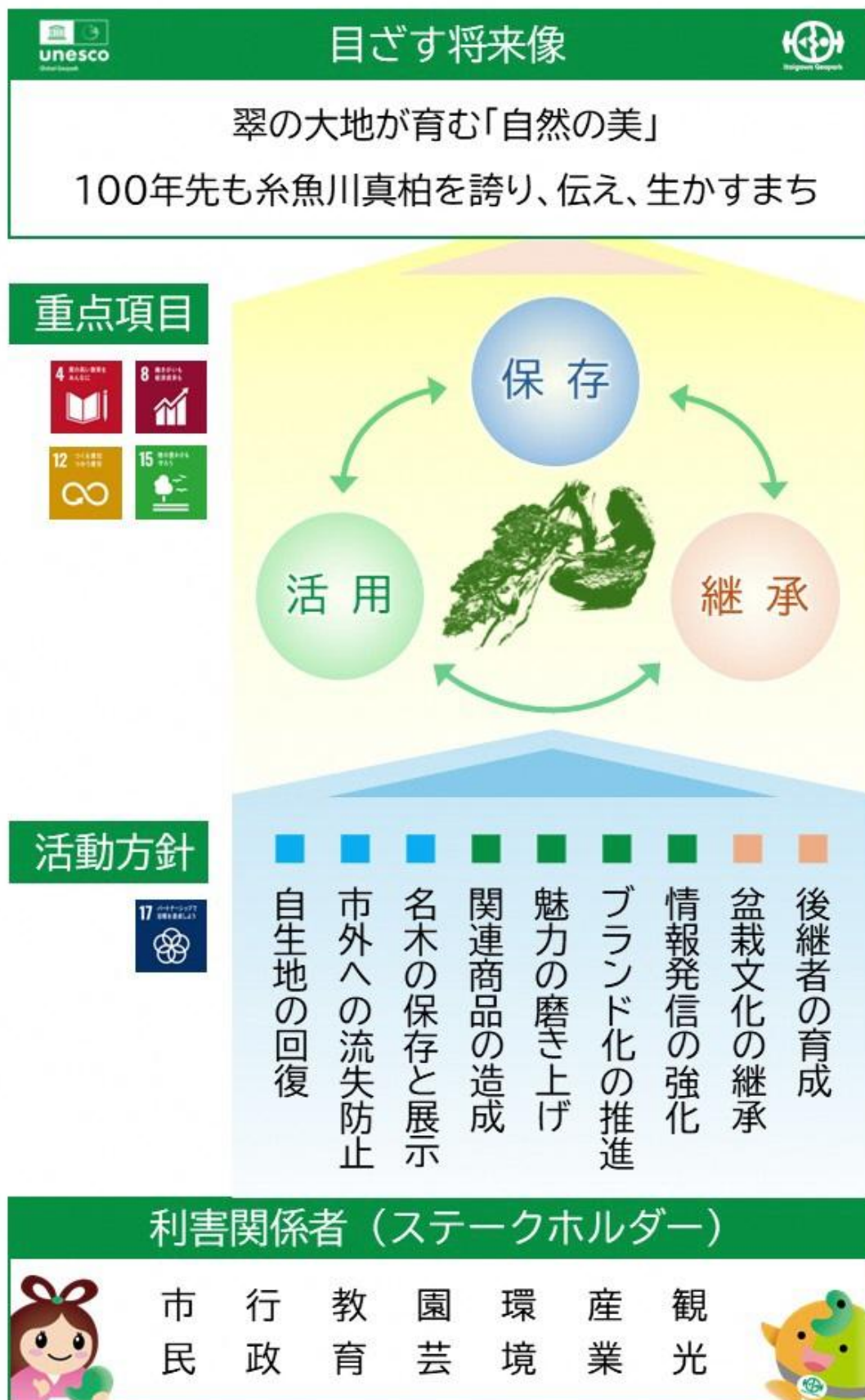
「100年先も糸魚川真柏を誇り」は住民の認知度向上と郷土愛醸成、「伝え」は末永く未来へ継承すること、「生かすまち」は交流人口及び関係人口拡大による地域振興への持続可能な活用を意味するものである。

・事業の推進体制

前述のとおり、令和2（2020）年に糸魚川真柏活用プロジェクトを立ち上げ、これまで官民協働による普及啓発や情報発信など各種活動を推進してきたが、ステークホルダーの巻き込みが不十分であり、住民や事業者が実感できるような取組になっていない。また、盆栽づくり体験やジオツアーなど観光商品の造成及び販売については、ノウハウがなく旅行業取扱資格等を有しない行政主導では、対応に限界があった。

今後、各種事業を効果的に展開していくためには、関係者が綿密に連携し各々の強みを生かせる体制づくりを進めていく必要がある。第5章の「今後の方針とスケジュール」については、社会情勢や財源確保、優先順位等も踏まえ、新体制で策定するアクションプランの中で具体的な内容や目標値（KPI）、実施主体を定めるものとする。

・イメージ図



第5章 糸魚川真柏の課題と対策

第1節 保存に関する現状と課題、今後の方針

(1) 現状と課題

・自生地の変化

かつて明星山や黒姫山などの山々には、幾星霜を経た糸魚川真柏の巨木や古木がたくさん自生していたが、大正時代から昭和時代の乱獲によって激減し、現在は容易に見ることができなくなった。

また、明星山が所在する小滝地区、黒姫山が所在する橋立地区、海谷溪谷に近い御前山区など山間部に位置する集落は、少子高齢化と人口減少が顕著であり、人材不足による地域力の低下によって糸魚川真柏を含む森林資源の管理及び活用が困難になってきている。これまでも、UIターンの促進や集落支援員配置など人口対策に取り組んできたが、市街地から距離が遠く交通の便が悪いこと、国内有数の豪雪地帯であること、食料など買い物をできる店がないことなどが妨げとなり、移住や定住に結びついていない。

さらに、気候変動等の影響により自生地周辺の動植物の生態など自然環境も変化してきている。

・気候変動の影響

近年は、夏季を中心とする記録的な猛暑と少雨による乾燥が厳しく、糸魚川真柏の大きな脅威となっている。天然の糸魚川真柏は、保水力の低い石灰岩の絶壁や岩場に根を張り、雨や霧等によってもたらされる少量の水分で命をつなぐが、長期間にわたる高温と乾燥は、岩盤自体の温度上昇と水分枯渇を招き、数百年間を生き抜いてきた古木であっても水不足に陥って枯死する可能性がある。

また、猛暑と少雨については、盆栽園や愛好家が保有する糸魚川真柏の盆栽への影響も確認されている。「鉢」という限られた生育環境では、高い気温は直ちに土壌温度の上昇につながる。近年の猛暑と乾燥は、従来どおりの管理技術では対応しきれないほどの熱害（根焼けや葉焼け）を引き起こすため、長年丹精込めて培養されてきた貴重な名木が失われてしまうこともある。

・名木等の流出および消滅

所有者の高齢化や経済的な事情等により、糸魚川真柏を含む盆栽を大量に手放してしまう事例が後を絶たない。特に所有者が亡くなった場合に、親族の中に盆栽を受け継いで管理できる人がいないなどの理由から、市外の盆栽業者にまとめて安価で譲渡してしまうケースが見受けられる。市外に流失した名木については、将来的に買い戻す方法を検討したい。

また、小滝地区など産地に近い集落では、庭木として敷地内に糸魚川真柏が植えられている居宅も少なくないが、住民の移転や家主の死去により放置され、樹形が崩れて価値が下がったり、枯れてしまったりすることもある。

・保存及び展示施設

現在、市内には盆栽園が3か所ある。ほかに多くの鉢植えを所有する愛好家もいるが、いずれも保存及び公開に対応できるほどのスペースや機能は備えていない。

市や糸魚川ジオパーク協議会に対し、糸魚川真柏の寄贈や買い取りを希望する所有者がいたとしても、現状では保存できる施設がなく管理技術を有するスタッフもほばいないため、それを受け取って活用することはできない。

また、糸魚川真柏を有償で譲り受ける場合は、糸魚川産であることを証明する根拠（DNA鑑定や由来書等）のほか、適正な買取価格の判定と予算確保が必要である。

(2) 今後の方針とスケジュール

※事業着手（期間） 早期：1～2年、中期：3～5年、長期：5～10年

項 目・内 容		事業着手 (期間)
1	拠点施設の整備と活用	
	(1) 拠点施設の整備 (2) 糸魚川真柏の保存と活用の推進にむけた機能整備 (3) 糸魚川真柏の受入れと保存及び管理 (4) 盆栽の展示及び販売、盆栽づくり体験の仕組みづくり (5) サテライト施設の整備 ・施設整備にあたっては、既存施設や空き家等の活用、民間事業者との連携等を検討する。	早 期 中 期 早 期 中 期 長 期
2	名木等の市外流出及び消滅防止	
	(1) 糸魚川真柏の受入（寄贈等）または購入 (2) 糸魚川真柏の交換会、即売会等の開催 (3) 市外に流出した糸魚川真柏の購入 (4) 市内の糸魚川真柏所有状況の調査 ・財源確保については、ふるさと納税やクラウドファンด์、グッズ販売による収益などを検討する。	早 期 早 期 長 期 中 期
3	自生地への復元と保護・保全	
	(1) 明星山や黒姫山など自生状況の調査 (2) 糸魚川真柏のDNA調査 (3) 原産地への糸魚川真柏の植樹 ・上記植樹については、自然環境に影響を与えないようにDNA鑑定や希少野生動植物の調査等を行う。	早 期 中 期 長 期

第2節 活用に関する現状と課題、今後の方針

(1) 現状と課題

・普及啓発に向けた情報発信

「糸魚川真柏」は、国内外を問わず盆栽愛好家の知名度が高い。近年は、ヨーロッパや東南アジアなどで盆栽が流行していることから、インターネットを活用した宣伝媒体の活用により、インバウンドも含めた観光客誘致が期待できる。

しかし、盆栽素材として有名ではあるものの、原産地である明星山や黒姫山等の特徴的な自然環境、石灰岩や火山岩地帯という地質学的背景、さらに明治時代に鈴木多平氏によって偶然発見された歴史的経緯、当地ならではの整姿技術など糸魚川真柏を取り巻く「大地と人のストーリー」の魅力について、十分に理解されているとは言い難い。



図 31 パンフレット

また、糸魚川ジオパークを象徴する自然遺産であるにもかかわらず、市民や次世代を担う子どもたちが糸魚川真柏の魅力や価値を学ぶ機会が限られている状況も改善すべき課題である。

・展示・交流施設の整備

現在、市内で営業する3つの盆栽園では、黒松や五葉松など他の樹種や山野草等とともに糸魚川真柏を販売しているが、観光客や市民が季節を問わずに糸魚川真柏を鑑賞したり、購入したり、体験したりできる拠点施設は整備されていない。また、盆栽園と原産地である明星山や黒姫山などの見どころが分かりやすく結び付けられておらず、観光客が糸魚川真柏ゆかりの地を巡り、地域経済の活性化に結びつける体制に課題もある。

交流については、盆栽づくりの技術者や生産者、来訪者が集い、糸魚川真柏の紹介や情報交換等を行える場が少ないことも、ファンの拡大や理解の深化が進まない要因のひとつと考えられる。

・体験・観光商品

令和2(2020)年に組織した糸魚川真柏活用プロジェクトが主体となり、講演会や展示会、お手入れ実演、植樹やミニ盆栽づくり体験等を実施してきたが、これらのイベントは単発に留まっており、常時提供可能なメニューとして販売されるに至っていない。特に、手入れ体験を軸に自生地の見学、当地で育まれた盆栽の歴史と文化をセットで体感できるようなストーリー性のある長期滞在型ツアーの造成を進める必要がある。

また、糸魚川真柏ファンを増やすため、生徒・児童や親子連れ、一般の観光客を対象に、楽しくお手軽に糸魚川真柏を体験できるプログラムが求められている。このほか、枯死した真柏を使用したオブジェ、糸魚川真柏にマッチするオリジナル盆栽鉢の製作、当地域固有の整姿技術を紹介する書籍など関連商品の開発を検討する。

・生産・販売促進

糸魚川真柏をツアーや体験、土産品として活用するために必要となる素材が不足している。今後も事業を拡大していくためには、需要に対して適量の素材を供給できる生産システムの構築が必要である。実生や挿し木、取り木など生産手段はいくつかあるものの、用途によっては10年以上培養しなければ商品にならない場合もあることから、年度ごとに使用する数量を想定したうえで、計画的に対応していかなければならない。

また、木そのものだけでなく、「糸魚川真柏」ブランドを象徴するような関連商品やノベルティの充実が求められている。特に海外から来訪する観光客が検疫上の制約を気にせず持ち帰り可能な商品のラインナップが欠如している。保存活動を経済的に支える仕組みを構築するためにも、土産品としての付加価値を高め、地域経済へ還元する仕組みが必要である。なお、将来的に糸魚川真柏の輸出についても検討していく。

(2) 今後の方針とスケジュール

※事業着手（期間） 早期：1～2年、中期：3～5年、長期：5～10年

項 目・内 容		事業着手 (期間)
1	ジオツーリズムの推進	
	(1) 拠点施設の整備（再掲） (2) 体験ツアー・メニューの造成と販売 (3) ジオパーク観光ガイドの育成と活用 (4) 関係施設との連携（大宮盆栽村等） (5) 関連商品・グッズ・ノベルティの作成 (6) マーケティング、動態調査等の実施 ※旅行商品については、オーバーツーリズム防止とSDGsへの貢献に留意する。将来的に海外への輸出等も検討する。	早 期 早 期 中 期 早 期 早 期 早 期
2	情報発信の強化	
	(1) インターネットの活用（HP、SNS等） (2) 宣伝ツールの拡充（パンフレット、PR動画等） (3) インバウンド対応（多言語化、受入体制の整備） (4) 主要施設での糸魚川真柏展示（FMM、駅等） (5) マスコミ・盆栽雑誌によるPR（広告等）	早 期 中 期 中 期 早 期 早 期
3	普及啓発事業の実施	
	(1) 講演会等イベントの開催 (2) 学校教育・生涯学習への活用 (3) サポーター制度の拡充 (4) 素材の確保（体験・販売用素材） (5) 自主財源の確保（クラウドファンด์等）	早 期 中 期 早 期 長 期 中 期

第3節 魅力づくりに関する現状と課題、今後の方針

(1) 現状・課題

・ブランド化の促進

糸魚川真柏は、優れた盆栽樹種として世界的に認知されているが、産地や品質を客観的に証明する明確な基準が設けられていないため、市場におけるブランドの信頼性の担保が課題となっている。すなわち、海外で大量生産した「糸魚川真柏」と本場である当地で育てたりアルな「糸魚川真柏」を区別する方法を検討する必要がある。



図 32 明星山と糸魚川真柏

また、糸魚川ジオパークの特徴的な大地と地質（プレート境界による隆起、火山岩や石灰岩地帯など）が数百年もの時間をかけて生み出した「自然の造形美」というストーリーを付加価値として活用しきれていない。

・糸魚川真柏のファン獲得

糸魚川真柏の関係者や愛好家が高齢化する一方、若い世代や初心者にとって盆栽は「ハードルが高い」という先入観が強く、新たなファン層の獲得が進んでいない。ファンを増やすことによって、口コミによる広がり期待できる。

盆栽の大きさや樹形は様々であり、盆栽鉢や花台、添えなどの飾り方によって印象は大きく変わってくることから、各世代の嗜好やライフスタイルに合わせた展示方法の研究や工夫を進めるとともに、著名人やインフルエンサー、ウェブサイトやSNS、テレビや雑誌等を活用した多角的な情報発信を強化する必要がある。

・地域のシンボルとしての活用

盆栽界では名の通った糸魚川真柏ではあるが、ヒスイやフォッサマグナ、糸魚川ー静岡構造線など他のジオパーク資源に比べて、市民の認知度は高くない。

一般的に「盆栽は趣味の世界」という認識が強い傾向にあり、さらに本市及び糸魚川ジオパークを象徴するシンボルとしての情報発信や活用が足りていないため、当地のアイデンティティとして市民が誇りを感じる環境が整っていない。ヒスイが「糸魚川市の石」に指定されているように、糸魚川真柏を「糸魚川市の盆栽」などシンボル化する方法も検討する。

図 33 糸魚川市のシンボル



市の木 ブナ



市の花 ササユリ



市の鳥 カワセミ



市の石 ヒスイ

(2) 今後の方針とスケジュール

※事業着手（期間） 早期：1～2年、中期：3～5年、長期：5～10年

項 目・内 容		事業着手 (期間)
1	ブランディング・マーケティング	
	(1) ジオストーリーの造成と活用	早 期
	(2) 魅力や価値のブラッシュアップ	中 期
	(3) 他のジオパーク資源とのコラボレーション	早 期
	(4) 販路拡大に向けたステークホルダーとの連携	長 期
2	糸魚川真柏の認証制度	
	(1) ITOIGAWA SHIMPAKU（仮称）ブランドの立ち上げ	中 期
	(2) 認証制度の整備	長 期
3	市民に対する魅力発信	
	(1) 地域のシンボル化（「糸魚川市の盆栽」など）	早 期
	(2) 公共施設への盆栽・解説パネル等の作成	中 期
	(3) 情報発信の強化（再掲）	早 期

第4節 盆栽文化の継承に関する現状と課題、今後の方針

(1) 現状・課題

・関係者の高齢化

糸魚川真柏の鮮やかな葉色と赤褐色の幹、堅牢なシャリ（舍利）やジン（神）をミックスした造形美を引き出す整姿技術や豪雪地帯の厳しい気候に対応した生育管理の知識を持つ熟練の愛好家や盆栽園経営者の高齢化が著しい。

市内の盆栽関係団体においても、会員の減少と高齢化が活動に支障をきたすようになってきている。長年にわたって受け継がれてきた当地域の特徴的な盆栽文化や手入れの技術が失われることがないように、写真や映像による記録保存や聞き取り調査等を実施する必要がある。

・若い世代に対するPR

前述のとおり、若い世代は糸魚川真柏を含む盆栽に対して「素人には難しい」「金と手間がかかる」「高齢者の趣味」という先入観が強く、興味を持ってもらうためには「美しい」「楽しい」「儲かる」などポジティブなイメージを付加する必要がある。

また、学校教育や生涯学習において、地域の歴史や自然環境を結び付けるツールのひとつである糸魚川真柏を知り、学ぶ機会が限られている。「ふるさとの宝」として認識されるためには、糸魚川真柏を身近な自然遺産・歴史文化資産として、子どもたちを中心とする市民全般が興味を持てるようなアプローチが必要である。

一方、近年は都市部を中心にお洒落なカフェやアパレルショップ、企業の受付窓口等に盆栽をレンタルして飾るケースも見受けられることから、若者や女性をターゲットとする情報発信も有効である。

・盆栽を通じた交流促進

盆栽関係者と一般市民、観光客が盆栽を通して日常的に交流し、技術や魅力を学び合える場が不足している。国内外の愛好家が「糸魚川真柏の聖地」として本市に注目しているにも関わらず、その追い風を盆栽文化の継承や新たな担い手の確保に結びつけられていない。

また、盆栽会以外に市内の愛好家が交流する機会がないことから、フリーで参加できる糸魚川真柏の交換会や直売会など、気軽に集まって意見や情報を交換できる場づくりが望まれる。このような取組が定着することによって、名木の市内流失防止や後継者育成等を促進する効果が期待できる。

・後継者の育成

職業として盆栽の生産者及び販売者を目指す人材はもちろん、貴重な地域遺産として糸魚川真柏を守り支える「サポーター」を体系的に育成・支援する体制を整える必要がある。また、糸魚川真柏の管理や手入れなど専門的な技術を学ぶためのプログラムや活動を継続するための経済的な支援の整備が課題である。

(2) 今後の方針とスケジュール

※事業着手（期間） 早期：1～2年、中期：3～5年、長期：5～10年

項 目・内 容		事業着手 (期間)
1	糸魚川真柏サポーター制度	
	(1) サポーター制度の整備及び募集	早 期
	(2) サポーターの育成（研修・講座等の開催）	早 期
	(3) 関連イベント等への関与	中 期
2	後継者の育成	
	(1) 整姿や植替えなど管理技術の継承	早 期
	(2) 外部人材（地域おこし協力隊等）の雇用	早 期
	(3) 盆栽園継承に向けた弟子制度の導入	中 期
	(4) 学校教育・生涯学習への活用（再掲）	長 期
	(5) 糸魚川真柏の交換会、即売会等の開催（再掲）	早 期
3	記録の保存	
	(1) 記録映像の制作	早 期
	(2) 歴史やこれまでの経緯などの聞き取り調査	早 期
	(3) 関係資料の保存（雑誌等の記事を含む）	長 期

口絵・図 目次

口絵 1 糸魚川真柏（山田博信氏所蔵）	3
口絵 2 相馬御風命銘「鶴の舞」と御風揮毫 きごう の和歌（軸装）	3
口絵 3 毎年5月に開催される翠風展 すいふうてん	4
口絵 4 糸魚川真柏の原産地として知られる明星山 みょうじょうざん の南壁と	4
図 1 糸魚川市章	4
図 2 糸魚川市の位置	4
図 3 ヒスイ製大珠	5
図 4 市内に広く分布するブナ林	5
図 5 フォッサマグナと地域開発構想	6
図 6 フォッサマグナミュージアム	6
図 7 世界ジオパーク認定	6
図 8 ユネスコ世界ジオパーク再認定	6
図 9 糸魚川ジオパークの基本理念	7
図 10 糸魚川ジオパークの24エリア	8
図 11 フォッサマグナの位置	9
図 12 明星山（1,188m）	9
図 13 白馬連山高山植物帯	10
図 14 ニホンカモシカ	10
図 15 水揚げされるベニズワイガニ	10
図 16 日本の東西文化の違い	11
図 17 1市2町の統合	12
図 18 親不知の4世代道路	13
図 19 JR 糸魚川駅に到着する北陸新幹線	13
図 20 越の丸ナス	13
図 21 代表的な海の幸	13
図 22 谷村美術館、糸魚川温泉、シャルマン火打スキー場、ヒスイ海岸	14
図 23 道の駅 親不知ピアパーク（左）マリンドリーム能生（右）	14
図 24 細かく鮮やかな鱗葉が特徴	15
図 25 小品の糸魚川真柏（片岡迪郎氏所蔵）	15
図 26 糸魚川市内の主な産地	16
図 27 黒姫山の岩肌	16
図 28 沖合から見る黒姫山	17
図 29 名木を産出した明星山	17
図 30 相馬御風	17
図 31 パンフレット	23
図 32 明星山と糸魚川真柏	25
図 33 糸魚川市のシンボル	25

資 料 編

- 1 糸魚川真柏保存活用計画策定委員会 規約
- 2 これまでの糸魚川真柏活用プロジェクトの取組
- 3 糸魚川真柏保存活用計画策定委員会 会議録
 - (1) 第1回 糸魚川真柏保存活用計画策定委員会
令和7年12月24日（水）14:00～16:00
 - (2) 第2回 糸魚川真柏保存活用計画策定委員会
令和8年2月4日（水）14:00～16:40
 - (3) 第3回 糸魚川真柏保存活用計画策定委員会
令和8年3月13日（金）14:00～16:45

1 糸魚川真柏保存活用計画策定委員会規約

(名称)

第1条 本会は、糸魚川真柏保存活用計画策定委員会（以下、「委員会」という。）と称する。

(目的)

第2条 委員会は、ユネスコ世界ジオパークの運営ガイドラインに則り、糸魚川ジオパークの特徴的な地域資源である糸魚川真柏の保護・保全と持続可能な活用を図るための「糸魚川真柏保存活用計画」を策定することを目的とする。

(所管事項)

第3条 委員会は、前条の目的を達成するため、次に掲げる事項について調査及び審議等を行う。

- (1) 糸魚川真柏及びその自生地 of 保護・保全に関すること。
- (2) 糸魚川真柏を活かした地域振興に関すること。
- (3) 糸魚川真柏の継承と人材育成に関すること。
- (4) その他、委員会の目的を達成するために必要なこと。

(組織)

第4条 委員会の委員は、次の各号に掲げる者の中から、市長が委嘱する。

- (1) 学識経験者
- (2) 盆栽関係者
- (3) 地元代表者
- (4) その他関係者

2 委員の任期は、令和8年3月30日までとする。

(役員)

第5条 委員会に次の役員を置く。

- (1) 委員長 1人
- (2) 副委員長 1人

2 委員長は、委員会の互選による。

3 副委員長は、委員長の指名による。

(役員の任務)

第6条 委員長は、委員会を代表し、会務を総理する。

2 副委員長は委員長を補佐し、委員長が欠けたときは、その職務を代行する。

(会議)

第7条 委員会の会議は委員長が招集し、委員長が議長を務める。

2 会議は、必要に応じて、電子通信（ウェブ会議）によって行うことができる。

(事務局)

第8条 委員会の事務を処理するため、糸魚川市産業部商工観光課内に事務局を置く。

附 則

(施行期日) この規約は、令和7年12月24日から施行する。

2 糸魚川真柏活用プロジェクト実施事業（令和2年～令和7年）

※令和7年12月1日現在

【事業目的】

国内外の盆栽ファンに知名度が高い「糸魚川真柏」を活用し、インバウンド対応も含めたツアー造成や盆栽づくり体験等の実施、関連商品の開発、後継者の育成等を進めることによって、糸魚川真柏の継承と地域の持続可能な発展を図る。

【実施主体】

糸魚川真柏活用プロジェクト会議 ※委員名簿は別添のとおり

【事業内容】

糸魚川市の「糸魚川真柏BONSAI・カルチャースクール・プロモーション事業」として、令和2（2020）年度から実施する。各事業の詳細は下記のとおり

■令和2（2020）年度

1 糸魚川真柏活用プロジェクト会議の開催

- (1) 構 成 員 日本盆栽協会糸魚川支部、奴奈川山野草愛好会、小滝地区自治振興協議会、糸魚川市観光協会、糸魚川市、糸魚川市ジオパーク協議会
- (2) 開 催 数 5回（3/5、7/20、8/20、10/15、1/21）

2 実施事業

- (1) 糸魚川真柏ミニ盆栽づくり体験（モニター体験）
 - ・内 容 盆栽園（3園）、ミニ盆栽づくり体験
 - ・日 時 令和2年11月14日（土）
13:00～17:30
 - ・会 場 ヒスイ王国館（糸魚川市大町）
 - ・参加者数 11人（うち外国人3人）※コロナ禍のため、市内在住者限定で募集
- (2) 情報発信
 - ・リーフレット作成 日本語版、A3二つ折り、カラー、2,000部
※英語版はデータのみ作成（ウェブサイト用）
 - ・ウェブサイト開設 日本語版・英語版
各3ページ（トップページ含む）



3 その他

- (1) テレビ放映
 - ・番組名 サンドウィッチマン&芦田愛菜の博士ちゃん（UX新潟テレビ21）
 - ・放送日 令和3年1月23日（土） 18:56～ ※約30分間
 - ・内容等 「盆栽博士ちゃん」の清水ちえりさんの希望により、明星山西壁に自生する「龍護（りゅうご）の神」（全長7m、樹齢は数百年）を撮影

■令和3(2021)年度

1 糸魚川真柏活用プロジェクト会議の開催 ※構成員は前年度と同様

(1) 開催数 4回(5/14、9/13、10/27、12/22)

2 実施事業

(1) 糸魚川真柏モニターツアー(マスコミ向け)

- ・内 容 フォッサマグナミュージアム
盆栽園(3園)、小滝川ヒスイ峡
高浪の池(盆栽づくり体験)
ヒスイ王国館
- ・日 時 令和3年11月4日(木)～5日(金)
- ・参加者数 6人(雑誌社、芸能人 ほか)



(2) 情報発信

- ・ウェブサイト開設 体験ページ(日本語版・英語版)、各2ページ

■令和4(2022)年度

1 糸魚川真柏活用プロジェクト会議の開催 ※構成員は前年度と同様

(1) 開催数 3回(4/25、6/23、10/12)

2 実施事業

(1) 糸魚川真柏の庭木植樹

- ・内 容 市民から無償提供された2本を
移植(広報紙等で募集)
- ・植樹場所 フォッサマグナミュージアム
入口付近
- ・完了日 令和5年3月22日
- ・その他 解説板を整備 縦400×横600mm(ス
テンレス、アクリル製)



(2) 糸魚川真柏ミニ展示会

- ・内 容 席飾り(主木、添え)を3席展示
- ・展示期間 令和4年9月23日～25日
- ・場 所 フォッサマグナミュージアム
ふるさと展示室 ※観覧無料



(3) 糸魚川真柏モニターツアー(外国人向け)

- ・日 時 令和4年10月22日(木)～23日(金) 1泊2日
- ・内 容 フォッサマグナミュージアム、盆栽園(3園)、小滝川ヒスイ峡
高浪の池(盆栽体験)、ヒスイ王国館(総括、アンケート)
- ・参加者数 6人(アメリカ、エストニア/各2人、フィリピン、ベナン/各1人)

(4) 情報発信

- ・リーフレット修正増刷 A3二つ折り、カラー、3,000枚 ※英語版はデータ修正

■令和5(2023)年度

1 糸魚川真柏活用プロジェクト会議の開催 ※構成員は前年度と同様

(1) 開催数 3回 (4/12、8/10、3/27)

2 実施事業

(1) 糸魚川真柏植樹広場の整備

- ・内 容 美山公園及び博物館の来訪者に糸魚川真柏をPRする。
- ・場 所 フォッサマグナミュージアム「化石の谷」南側
- ・竣 工 令和5年4月30日
- ・そ の 他 6月17日に竣工記念植樹を実施(フォッサマグナミュージアム友の会と共催)、盗難防止用に監視カメラとセンサーライト(各1台)を設置



(2) 糸魚川真柏普及講演会

- ・内 容 講演会と盆栽づくり実演、秋の盆栽・山野草合同展と同時開催
- ・日 時 令和5年10月8日(日) 13:30~16:30
- ・講 師 等 講演会: 清水ちえりさん(盆栽博士ちゃん)
盆栽づくり実演: 中村慎太さん(大宮盆栽美術館 技師)



- ・参加者数 35人
- ・場 所 ヒスイ王国館(糸魚川市大町)

(3) 県石ヒスイ指定1周年記念展「大地がくれた贈りもの～糸魚川真柏とヒスイ～」

※第1回 糸魚川世界の石展(同実行委員会主催)と同日開催

- ・内 容 ヒスイとならぶ本市の宝物として糸魚川真柏を展示(3席)
- ・会 場 ビーチホールまがたまスタジオ ※入場無料
- ・期 間 令和5年11月18日(土)~19日(日)
- ・見学者数 1,700人



(4) 旅行関係者に対する糸魚川真柏PR展示

- ・内 容 旅行代理店(京都府)の市長訪問時に、糸魚川真柏を展示し説明した。
- ・日 時 令和5年12月22日(金) 15:30~

(5) さいたま市立大宮盆栽美術館の視察

- ・内 容 外国人観光客誘致に向けた連携協議、盆栽等の展示状況確認
- ・日 時 令和5年8月23日
- ・従事者 糸魚川市 2人、糸魚川市観光協会 1人

■令和6(2024)年度

1 糸魚川真柏活用プロジェクト会議の開催 ※構成員は前年度と同様

(1) 開催数 3回 (4/12、8/10、3/27)

2 実施事業

(1) 糸魚川真柏植樹フェス 2025

- ・内 容 講演会と盆栽づくりの実演、明星山や高浪の池への糸魚川真柏植樹
- ・日 時 令和6年10月5日(土) 10:00～16:30
- ・会 場 講演会：小滝地区公民館
植樹：高浪の池、明星山(登山道)
- ・講 師 講演会：太田茂機さん
(日本盆栽協会糸魚川支部 副支部長)
盆栽づくり実演：中村慎太さん
(大宮盆栽美術館 技師)



(2) 県石ヒスイ指定2周年記念展「大地がくれた贈りもの～糸魚川真柏とヒスイ～」

※糸魚川世界の石展(同実行委員会主催)と同日開催

- ・内 容 ヒスイとならぶ本市の宝物として糸魚川真柏を展示(3席)
- ・会 場 ビーチホールまがたま スタジオ ※入場無料
- ・期 間 令和6年11月16日(土)～17日(日) 2日間
- ・見学者数 2,000人

(3) 情報発信

- ・リーフレット修正増刷 A3二つ折り、カラー
日本語版：3,000部 英語版：2,000部 ※英語版は、大阪・関西万博等で配付

■令和7(2025)年度 ※令和7(2025)12月1日現在

1 糸魚川真柏活用プロジェクト会議の開催 ※構成員は前年度と同様

(1) 開催数 1回 (9/29)

2 実施事業

(1) 真柏普及イベント「大地がはぐくむ自然の美 2025～糸魚川真柏の魅力と育て方～」

※秋の盆栽・山野草合同展示会(日本盆栽協会糸魚川支部主催)と同時開催

- ・内 容 糸魚川真柏の普及促進を図るため、特別講演、手入れ実演、盆栽づくり体験を行う。
- ・日 時 令和7年10月26日(日)
- ・会 場 ヒスイ王国館(糸魚川市大町)
- ・講 師 ①盆栽づくり実演：坂本隆雄さん(大宮盆栽村 芙蓉園)、60人参加
②講演「私と糸魚川真柏と盆栽」：清水ちえりさん(世界盆栽友好連盟大使)、30人参加



③盆栽づくり体験：坂本隆雄さん（大宮盆栽村 芙蓉園）、20 人参加

④糸魚川真柏サポーターズ制度説明会、2 人参加

(2) 大阪・関西万博出展

- ・内 容 2025 日本国際博覧会（通称：大阪・関西万博）の新潟県催事「新潟の彩り ～伝統文化とものづくりの技～」に出展し、糸魚川ジオパークならではの特徴的な地域資源であるヒスイ（翡翠）と糸魚川真柏の展示及び販売を実施
- ・会 期 令和 7 (2025) 年 7 月 13 日(日)～17 日(木) 10:00～19:00
※最終日は 16:00 まで
- ・会 場 大阪・関西万博会場内
ギャラリーWEST
- ・主 催 者 新潟県（受託業者は J T B）
- ・参 加 者 新潟県、糸魚川市、新潟市、津南町
- ・来 場 者 約 24,000 人（5 日間）



(3) 糸魚川真柏の庭木植樹

- ・内 容 市民から無償提供された 1 本を移植
- ・植樹場所 長者ヶ原考古館 来館者用歩道付近
- ・完了日 令和 7 年 6 月 13 日(金)

(4) 県石ヒスイ指定 3 周年記念展「大地がくれた贈りもの～糸魚川真柏とヒスイ～」

※糸魚川世界の石展（同実行委員会主催）と同日開催

- ・内 容 ヒスイとならぶ本市の宝物として糸魚川真柏を展示（3 席）
ミニ盆栽づくり体験 2 回（定員 24 人、参加者 22 人）
糸魚川真柏の販売
- ・会 場 ビーチホールまがたま スタジオ ※入場無料
- ・日 時 令和 7 年 11 月 15 日(土)～16 日(日)
- ・見学者数 1,500 人（2 日間）

(5) 糸魚川フェア出展

- ・日 時 令和 7 年 11 月 29 日(土)～30 日(日)
- ・会 場 新潟県情報館 THE NIIGATA（東京都銀座）
- ・内 容 糸魚川真柏ミニ盆栽づくり体験の実施
- ・体験者数 30 人（15 人×2 回）

糸魚川真柏活用プロジェクト会議 委員名簿

※令和7年12月1日現在

No.	所 属	備 考	氏 名	備 考
1	日本盆栽協会 糸魚川支部	会 長	後 藤 高 根	
2		副 会 長	太 田 茂 機	梢風園
3		事務局長	山 田 博 信	
4		会 員	梅 沢 一	姫川園
5		会 計	小 池 憲 治	
6	奴奈川山野草愛好会	会 長	片 岡 迪 郎	片岡ガーデン
7	小滝地区自治振興協議会	会 長	伊 藤 信 正	
8	(一社)糸魚川市観光協会	事務局長	斉 藤 清 一	
9	株式会社たかなみ	代表取締役	伊 藤 大 貴	

【 事 務 局 】

No.	所 属	備 考	氏 名	備 考
1	糸魚川市産業部商工観光課 // ジオパーク推進室	課 長	山 崎 和 俊	
2		課長補佐	小 林 猛 生	室長兼務
3		主 査	霜越 智恵子	
4		主 査	鳥 越 寛 子	
5		職 員	ブラウン・セオドア	

3 糸魚川真柏保存活用計画策定委員会 会議録

■ 会議名 / 第1回 糸魚川真柏保存活用計画策定委員会

■ 開催日時 / 令和7年12月24日(水) 14:00～16:00

■ 開催場所 / 糸魚川市民会館 3階会議室兼練習室

■ 出席者 / 11人 ※氏名等は下記のとおり

策定委員／7人	・ 本田 量久 氏（東海大学／教授）※委員長 ・ 後藤 高根 氏（日本盆栽協会糸魚川支部／支部長）※副委員長 ・ 五百川 裕 氏（上越教育大学大学院／教授）※オンライン参加 ・ 秋本 周 氏（環境省妙高高原自然保護官事務所／自然保護官） ・ 山田 博信 氏（日本盆栽協会糸魚川支部／事務局長） ・ 伊藤 信正 氏（小滝地区自治振興協議会／会長） ・ 齊藤 清一 氏（糸魚川市観光協会／事務局長）
欠席者／1人	・ 中村 慎太 氏（さいたま市大宮盆栽美術館、盆栽技師）
事務局／4人 (商工観光課)	・ 山崎 和俊／課長 ・ 小林 猛生／課長補佐（兼ジオパーク推進係長） ・ 霜越 智恵子／主査 ・ ブラウン セオドア／職員

1 開 会

- ・ 事務局、以降進行

2 あいさつ

山崎課長	糸魚川真柏はヒスイと並ぶ「地域の宝」であり、インバウンド誘客にも活用できる観光資源と認識しているが、所有者の高齢化や後継者不足、名木の流出等の課題が山積している。これらを踏まえ、保存と持続可能な活用を図るための計画を策定したい。
------	---

3 委員委嘱

- ・ 委嘱状は机上配付

4 策定委員紹介、事務局紹介

- ・ 自己紹介

5 正副委員長選出

- ・ 自薦他薦なし、「事務局一任」の声あり
- ・ 事務局の提案により委員長は本田量久氏、副委員長は後藤高根氏に決定

6 報 告

(1) 委員会規約について

- ・ 糸魚川真柏保存活用計画策定委員会規約
- ・ 質 疑 な し

資料No.1

(2) 糸魚川市と糸魚川真柏の概要について

- ・糸魚川市（糸魚川ユネスコ世界ジオパーク）と糸魚川真柏の概要 資料No.2
- ・糸魚川真柏活用プロジェクト実施事業 資料No.3
- ・質 疑

山田委員	計画の策定にあたり、真柏の分布について補足したい。真柏は高山性のものであるが、海岸性のものもある（伊豆半島など）。「糸魚川真柏」というブランドは、西は富山県の片貝川、東は戸隠あたりまでの範囲から出たものの総称であるが、山ごとに葉性などの特徴が異なるという認識を持ってほしい。
本田委員長	他地域（伊豆半島や東北など）の盆栽関係者との交流や情報共有はあるか。
山田委員	個人的な交流や展示会を通じた交流はある。愛好家からは「育て方、特に葉の変化」に関する問い合わせが多い。
本田委員長	真柏イベントの参加者について、市内外の割合はどの程度か。
【事務局】	イベントや講演会の参加者は地元が7割、市外が3割程度と分析している。ただし、専門的な内容やサポーター説明会等になると、東京や長野など市外からの参加者が過半数を超える傾向がある。
本田委員長	体験後に盆栽のアフターケアなど、つないでいく仕組みが必要。
秋本委員	長野市内の小学校で、クラス単位で生き物を育てているところがある。盆栽も同様に、学校教育の中で担当を決めて育てることで、若い世代の興味・関心を喚起できるのではないか。 インバウンド（富裕層・知識層）は、盆栽そのものを持ち帰るよりも「本物（自生地）」を見たいという欲求が強いのではないか。ガイドを伴って自生地を案内する高付加価値ツアーなどは、ジオパークの推進と経済効果の両立につながる。
【事務局】	大宮盆栽美術館では、普及事業として地元小学生に盆栽を配付している。糸魚川でも学校単位やクラス単位での育成は検討の余地がある。インバウンド向けのプレミアムツアーも計画に盛り込みたい。
山田委員	聖学院中学校からミニ盆栽づくり体験（40人）の希望がある。まだ決定していないが、真柏の素材不足を懸念している。 糸魚川真柏活用プロジェクトは当初、インバウンド対応が中心であったが、新型コロナウイルス感染拡大等の事情でターゲットが変わってきた。国風盆栽展には若い外国人多く来場しているので、インバウンドの需要もあると思う。真柏も人気が高い。真柏の小品盆栽は早く生産できるのが魅力である。
本田委員長	インバウンドの需要は確かにある。また、若い外国人観光客はSNSに情報を拡散してくれる。行政でのSNS管理は難しいと思うが、今の活用状況は？

【事務局】	現在はフェイスブック、インスタグラム、X(旧ツイッター)、YouTubeを活用している。いずれも糸魚川ジオパークのアカウントを使用しており、糸魚川真柏専用のアカウントはない。イベントの宣伝等の情報発信をしているが、「映える」写真を撮る技術がない。
本田委員長	SNSは重要な情報発信ツールなので、女性の発信力を活かせばいい。清水ちえりさん(博士ちゃん)とも連携・協力すべきだ。

7 協議事項

(1) 計画策定に係る糸魚川市の方針について

・質 疑

本田委員長	計画の実施は2026年度から実施となっているので、3月までに策定するのか。実施期間は何年間を想定しているのか。
【事務局】	3月末までに計画を策定し、4月以降に実施していく予定。期間は10年間で、社会情勢に応じて適宜内容を見直す予定としている。
本田委員長	この委員会の目的が計画を練り上げることであれば、令和8年度も委員を継続するイメージでよいか。
【事務局】	そのイメージで差し支えない。
齊藤委員	なぜこのタイミングで計画を策定するのか。これから10年間続けるために計画がいるのか。何かしたいことがあるため、計画を立てる必要があるということか。
【事務局】	令和2年に糸魚川真柏活用プロジェクトを立ち上げ、今年で5年目を迎えるが、そろそろ第2ステージに移行する必要がある。 今後は真柏を保存する施設が必要になるかもしれないし、その管理ができる職員や専門員(学芸員)が必要になるかもしれない。このような事業を進めるためには計画が必要になる。市民に理解いただいたり、予算や補助金を要求したりする際の根拠になる。
齊藤委員	計画案の中にも「施設」の整備についての文言があるが、それが主な目的なのか。もう少し時間をかけて計画すればいいと思う。
本田委員長	この「施設」は新設する予定なのか。既存の施設を活用するか。
【事務局】	委員会の中で意見を聞きながら整備方法を検討する予定であるが、現段階では既存施設の活用が望ましいと考えている。 近年は所有者が亡くなり、管理できなくなった真柏盆栽の寄贈も増えている。また市外に真柏が流出してしまうケースも見受けられることから、できるだけ早い段階で保存施設(既存または新設)の整備が必要になるかもしれないと考えている。
本田委員長	保管場所としては、谷村美術館や翡翠園などの施設も検討した方がいいのではないかと。日本庭園と合わせて楽しむのも良い。糸魚川に相応しい施設がこの他に何件があるはずだ。

山田委員	保存施設も大切だが、市内の盆栽関係者の平均年齢が高いため、技術の継承が最優先だと思う。今すぐ動かないとその知識が失われる恐れがあるので、早急に計画をたてるべきだ。
五百川委員	－ 途中参加（オンライン）、自己紹介 －
齊藤委員	すぐに動くなら、短期計画（アクションプラン）を作成し、具体的な要素を記載する必要があるのではないかな。
【事務局】	現在は、糸魚川真柏に関する市（行政）の計画がない。この保存活用計画で方向性を定めたいので、具体的なスケジュールを詰めていきたい。
齊藤委員	計画には、具体的な推進体制を載せる必要がある。誰が何をやりたいかを明確しなければならない。観光協会では、価値のある資源をお金になるように活かすことが主な仕事だが、具体的な推進体制がなければ進みにくい。
【事務局】	これまでは、主に市民や観光客に真柏を知ってもらうための普及啓発活動を進めてきた。その先のステージに移行するためには、委員会で策定した計画が必要である。
本田委員長	この委員会で、多くの関係者をつなぐことができれば良いと思う。

(2) 策定スケジュールについて

・質 疑

【事務局】	本会議の意見を踏まえて計画書を加除修正し、メール等で適宜共有していく。委員会は、可能であれば3月末までに2回開催したいと考えている。後日、日程調整させていただく。
秋本委員	明星山など原産地に植樹した場合、盗掘のリスクが出てくる。具体的な防犯対策が必要である。

8 その他

- ・ 次回の開催は2月上旬あたりで調整する。
調整状況によっては、オンライン開催も検討する。

9 閉 会

- ・ 後藤高根副委員長

以上

■ 会 議 名 / 第2回 糸魚川真柏保存活用計画策定委員会

■ 開催日時 / 令和8年2月4日(水) 14:00～16:40

■ 開催場所 / 糸魚川市役所 204 会議室

■ 出席者 / 10人 ※氏名等は下記のとおり

策定委員／6人	・ 本田 量久 氏（東海大学／教授）※委員長 ・ 後藤 高根 氏（日本盆栽協会糸魚川支部／支部長）※副委員長 ・ 五百川 裕 氏（上越教育大学大学院／教授）※オンライン参加 ・ 山田 博信 氏（日本盆栽協会糸魚川支部／事務局長） ・ 伊藤 信正 氏（小滝地区自治振興協議会／会長） ・ 齊藤 清一 氏（糸魚川市観光協会／事務局長）
欠席者／2人	・ 秋本 周 氏（環境省妙高高原自然保護官事務所／自然保護官） ・ 中村 慎太 氏（さいたま市大宮盆栽美術館、盆栽技師）
事務局／4人 （商工観光課）	・ 山崎 和俊／課長 ・ 小林 猛生／課長補佐（兼ジオパーク推進係長） ・ 霜越 智恵子／主査 ・ ブラウン セオドア／職員

1 開 会（進行：事務局）

・ 事務局、以降進行

2 あいさつ

山崎課長	今年の1月下旬に盆栽を取り上げたテレビ番組が2本放送された。ヨーロッパやタイなど外国での「盆栽ブーム」やレンタルビジネスの広がりが紹介されており、糸魚川真柏の可能性を再認識した。今回は、主に現状と課題を踏まえた具体的な対策等についてご審議いただきたい。
------	--

3 協議事項（進行：本田量久委員長）

(1) 計画策定に係る糸魚川市の方針について

・ 質疑と意見

五百川委員	第3章の植物学的表記は、「ヒノキ科ビャクシン属」ではなく「ヒノキ科ネズミサシ属（ビャクシン属）」が正しく、学名には命名者の表記を追加すべきだ。いくつか間違いがあるので、後ほど修正案をまとめて送る。
山田委員	第4章の将来像について、ヒスイと真柏を連想させる「翠（みどり）」は糸魚川らしく、翠風展も連想できるので良いと思う。推進体制については、行政（市）が手を引くと終わってしまう可能性が高いため、市総合計画やジオパーク事業の中に真柏を明確に位置付ける必要があるのではないか。
齊藤委員	第4章の推進体制で、行政がバトンタッチする相手が具体的に示されていない。実施主体として団体名を記載するなら、その組織の意思決定が必要となる。誰が計画を推進するのかを明確にしたうえで、行政の伴走支援が必要だ。まずは緊急性と実現性が高い取組から進めるべきではないか。

【事務局】	本計画は総合的な活動方針を定めるものであり、具体的な実施方法については、年度ごとにアクションプランを立てて対応する予定である。 民間主導が理想であるが、単に丸投げするのではなく、ジオパーク活動の一環として市も支援していく。観光協会と糸魚川ジオパーク協議会の統合を進めているが、新組織でも真柏活用を推進できるように調整したい。
齊藤委員	実施主体に示されていない団体は協力しにくいのではないかな。それより、優先順位とスケジュール（早期・中期・長期）が分かる方が良い。
【事務局】	第5章の保存事業に、自生地環境変化や気候変動の影響を把握するためのDNA調査を記載した。「糸魚川真柏」を鑑定・認定できるようになれば、植樹はもちろん、市場に出まわる真柏が糸魚川産かどうかを区別できるようになる。糸魚川真柏のブランド化につながると考えている。
五百川委員	DNA調査が提案されているが、新潟大学や上越教育大学では対応できないので、専門機関（森林総合研究所など）と相談すべきである。
山田委員	DNA鑑定の有効性であるが、糸魚川真柏と他地域の真柏の差は少ないのではないかな。また、接ぎ木されていると、葉が糸魚川、幹や根が他地域などのようなケースも考えられる。どこまで調べるかを決める必要がある。
【事務局】	自生地の復旧にあたっては、環境保護の観点から身元がはっきりした木を植樹しなければならないことから、DNA鑑定や現況調査は必要であると考えている。調査にあたっては、ご指摘のとおり専門機関と相談する。 自生地の調査や植栽は、小滝生産森林組合や地権者など関係者の承認を得てから実施したい。ドローンの活用も検討する。DNA鑑定で糸魚川真柏を区別できる場合は、「血統書」や「ナンバリング」の制度も検討したい。
齊藤委員	拠点施設（保存・展示施設）は、本当に整備するのか。
【事務局】	真柏の保存・展示機能を有する拠点施設の整備が必要と考える。新設は難しいので、既存施設や空き家の活用を検討している。
山田委員	第5章の活用について、ミニ盆栽づくり体験や育三郎のネット販売などの実績はあるが、挿し木（苗木）の生産能力が足りないため、これ以上事業を拡大できない。苗木の安定的な生産と素材確保が課題である。
本田委員長	計画全体について、写真や図表に番号を付けた方が良いのではないかな。所有者が分かるものには、その旨を注記として入れてもらいたい。
山田委員	口絵にある名木「鶴の舞」は、枯死したとの話もあったが、近代盆栽の編集部によれば、まだ存在していると聞いた。ただし、所有者は未公開で、樹形もかなり変わったようだ。

4 その他

- ・ 次回開催は3月中旬あたりで調整する。事前に計画（修正後）を送信する。

5 閉 会

- ・ 後藤高根副委員長

以上

■ 会 議 名 / 第3回 糸魚川真柏保存活用計画策定委員会

■ 開催日時 / 令和8年3月13日（金）14:00～

■ 開催場所 / 糸魚川市役所 201 会議室

■ 出席者 / 8人 ※氏名等は下記のとおり

策定委員／6人	・ 本田 量久 氏（東海大学／教授）※委員長 ・ 秋本 周 氏（環境省妙高高原自然保護官事務所／自然保護官） ・ 中村 慎太 氏（さいたま市大宮盆栽美術館、盆栽技師） ・ 後藤 高根 氏（日本盆栽協会糸魚川支部／支部長）※副委員長 ・ 山田 博信 氏（日本盆栽協会糸魚川支部／事務局長） ・ 伊藤 信正 氏（小滝地区自治振興協議会／会長）
欠席者／2人	・ 五百川 裕 氏（上越教育大学大学院／教授） ・ 齊藤 清一 氏（糸魚川市観光協会／事務局長）
事務局／2人 （商工観光課）	・ 小林 猛生／課長補佐（兼ジオパーク推進係長） ・ ブラウン セオドア／職員

1 開 会（進行：事務局）

・ 事務局、以降進行

2 あいさつ

小林補佐	本日が最後の委員会となる。当市議会の予算審査特別委員会が終わり、糸魚川真柏に関する予算は承認される見込みとなった。3月末に人事異動も発表されるが、市の体制や予算に左右されることなく、この計画に基づいて関係者が連携して糸魚川真柏の保存と活用を進めていきたい。
------	--

3 協議事項（進行：本田量久委員長）

(1) 糸魚川真柏保存活用計画（案）の確認について

・ 質疑と意見

本田委員用	第4章の「将来像」について、KPI の具体的内容をどう考えているか。情報発信の主体と方法は？
【事務局】	アクションプランで定める予定であるが、主にツアー本数、イベント参加者数、レスキューした真柏の本数、サポーター人数を想定している。 情報発信は即効性と拡散性の高いインターネット（SNS やホームページ）が中心になるが、ステークホルダーと連携し、それぞれ得意な方法で発信していく予定（展示、チラシ、ポスター、雑誌等）。
山田委員	第5章1節の「DNA鑑定」について、産地によってどれほど違いが出るかわからない。違いが出ないかもしれないので、コスト対効果や重要性に疑問がある。

【事務局】	当市内で糸魚川真柏を買う場合、本物でなければ苦情になる。ヒスイにおいても、外国産原石を産地偽装で販売してクレームを受けたケースもあった。産地表示は大事であり、その根拠とするためにもDNA調査は必要だ。また、自生地への復旧活動の際、確実に糸魚川産真柏を植樹するための根拠になると考えている。当市産を明確に証明できる木を挿し木等で増やし、由来書（血統書のようなもの）を付けて管理する方法が望ましい。
秋本委員	行政でDNA鑑定に対応する場合、誰に対して、どこまで鑑定するのかという基準を検討する必要がある。 「保護保全」の取組にはKPI設定が難しいから、検討が必要。
伊藤委員	金子つつじ園や小滝地区公民館に植えた糸魚川真柏は確実に小滝産のため、挿し木素材に活用すればいいのではないかと。
本田委員長	「DNA鑑定」という言葉の使い方について、書きぶりを検討すべきだ。
後藤副委員長	第5章の「サテライト施設」についてはイメージが湧かない。
【事務局】	拠点施設の新設は多額の費用がかかるため、空き家等を活用して真柏の展示や管理、体験等を行える場所を整備したい。地域おこし協力隊員の住居を兼ね、柵の設置などセキュリティにも配慮する。拠点施設の運営が軌道に乗れば、糸魚川駅や北陸道サービスエリア等へのサテライト施設の整備を検討したい。
【事務局】	第5章第3節の「魅力づくり」は、盆栽に関心がない市民への情報発信がメインである。「糸魚川産ヒスイ」のようなブランド力を目指しながら、当市の「シンボル」としても活用する。
本田委員長	「敷居が高い」という表現はよく「ハードルが高い」や「高級すぎる」との意味で使われるが、本来は「負い目を感じて訪れにくい」という意味になる。表現を検討すべきではないかと。
山田委員	過去に作成した糸魚川真柏の紹介パネルを、公共施設や駅などに一定期間循環展示させると良いのではないかと。
【事務局】	フォッサマグナミュージアムや市民会館前への植樹及び解説板設置は、市民や観光客が糸魚川真柏を学ぶ良い機会になっている。庭木の維持管理には費用がかかるが、他の施設への植樹についても検討したい。また、関係施設をめぐるができるよう「糸魚川真柏マップ」を公開したい。
本田委員長	第5章第4節の「継承」について、「若い世代」は20代か？移住を考えると40～50代、セカンドライフの60代も対象では。
【事務局】	60代でも良いが、後世への継承を考えれば「40～50代」が望ましい。学校教育での活用も重視している。
秋本委員	コロナ禍で流行ったベランダでのガーデニングで糸魚川真柏を育てても良いと思う。市内の子どもたちに1人1鉢配付が理想である。

山田委員	「サポーター制度」の具体的なイメージは？
【事務局】	真柏に関心があるが接点がない、親から引き継いだが手入れが分からないような人たちの入口としたい。イベントや講演会等の手伝いや拠点施設の運営サポートを通じて盆栽会や地元の愛好家との交流を進める。5月の翠風展から募集開始できるように進めている。
後藤副委員長	予算化は4月からであるか。毎年予算計上をするか。
【事務局】	市の予算は年1度であるが、必要に応じて補正予算も可能である。糸魚川真柏活用プロジェクトに関する予算は、市の負担が中心となるが、糸魚川ジオパーク協議会の予算も活用していく予定である。具体的な計画や予算、財源等についてはアクションプランの中で検討する。
本田委員長	本日のご意見ご提言を反映して計画が完成する。最終調整は事務局に一任してよろしいか。
委員全員	異議なし。

(2) 今後の事業推進体制について

【事務局】	委員会の承認を得たので、修正した計画に本日の会議録を追加する。計画が完成したら市長決済を経て公示・縦覧という手順で進める。 アクションプランについては、新年度に入ったら策定作業を進める予定であるが、実施主体を決めるうえで総会等での承認が必要な団体もあると思うので、2～3か月程度の時間を要する見込みである。それまでは、糸魚川真柏活用プロジェクトで取り組んできた事業を継続して進めたい。
-------	--

(3) 計画策定後の策定委員の関わりについて

【事務局】	計画の策定をもって本委員会は役目を終える。これまでのご協力に感謝する。4月以降は、アクションプランに基づいて糸魚川真柏の保存と活用を推進するが、策定委員の皆さんには今後もアドバイザーとして関わっていただきたい。後日、依頼状を送付するので、ご承知おきいただきたい。就任を承諾してもらえる場合は、委嘱状を発行する。会議出席や現地視察等に参加いただいた際には、その都度旅費と謝礼を支払う予定である。
-------	---

(4) その他

4 その他

- ・第38回翠風展の開催についての紹介

5 閉会

- ・後藤高根副委員長

以上

